
真《チェンジ！！》リリカルなのは 世界最後の日

早乙女研究所

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真≪チェンジ！≫リリカルなのは 世界最後の日

【Nコード】

N7481U

【作者名】

早乙女研究所

【あらすじ】

流竜馬の死から十年…彼の魂を受け継いだ雛鳥たちが、大空へとそれぞれ羽搏いていた頃。ミッドチルダの地下深くに、ソレは鼓動を続けていた…

真≪チェンジ！≫リリカルなのはシリーズ最終章、ついに始動！！人類は、生き残る事が出来るのか！！

プロローグ（前書き）

のっけからクライマックス感バツグンです。

プロローグ

時は近未来。とある世界で、人類は、永遠の謎とされてきた【ゲッター線】の採取に偶然成功した。だが、これが世界最後の日の始まりになるとは、誰も知る者はなかった。

新暦67年。突然の【ガジェット・ドローン】の襲来により、ゲッター線開発基地は瞬く間に占拠。以後3年にも及ぶ【ガジェット戦争】が勃発した。

時空管理局は、ミッドチルダ侵攻を阻止すべく、急きよ世界中のエキスパートを集めた【特殊任務班6課】を設立。その中には、かつて闇の書事件を解決に導いた英雄たちの姿もあった。彼らの活躍もあり、時空管理局は全てのガジェットの殲滅に成功した。だが、結局ガジェットが一体、何のために、誰が建造したのかについては謎のままだった。

そして、5年の歳月の過ぎた新暦75年の春。人類は、予想だにしていなかった敵と遭遇することとなった！！それは！！！！

「まったく、何だつてんだ、この騒ぎは。」

嵐の夜、一台のトラックが走っていく。運転手の男はそう言っただけでハンドルを握る。

「さあ…ゲッターチームの先輩が駆りだされたんだ。ただ事でない事は確かだろうよ。」

「やめろよ、ゲッターチームなんて…昔の話だろ。」

運転手の男は言った。

「なあ…ヴァイス。どうも俺は、最近の局のやり口が気に入らねえ。お前の方にも、何か情報はねえのかい…？」

助手席に乗っていたヴァイスは、少し黙っていった。

「そうですね…先輩。あれも確か…嵐の夜の出来事だった。」

「やめろ、忘れちまえってんだ、そんな事。」

「でも…でも、武蔵先輩…！」

「いいか、ヴァイス。俺はな…」

「あんたはそれだっていい！！でもな、俺は…」

車内で言い合う二人。武蔵は帽子をかぶりなおしていった。

「忘れちまえよ…ゼスト隊のみんなも、もう死んじまったんだ。」

真っ暗な部屋の中。そこには、無数のろうそくの火がともされている。そこにたたずむ二人の男女。銀髪の美しい女が言った。

「かつて…この雷だけが、愛しい死者に再び命の灯を与えることのできる唯一のものと信じられていた。」

そう言って、女は煙草をくわえる。

「もちろん…物語の中だけの話と言った方がよろしいですか？」

彼女はタバコに火を付けると、ふうつと息を吐いた。

「この場合は特に。」

すると、メガネをかけた白衣の男は言う。

「何を言います…もはや、夢と現実を隔てていた壁は崩れ落ちたんですよ。フッフ…僕は作り上げました。物語ではなく…本物を。」

「ですが…彼女は血を流す事が出来るのでしょうか？そう、人として…」

そう言って、女はガラスの破片を握りしめる。細い指先から血が滴り落ちる。

「さあ…それこそ、神のみぞ知る…と、言ったところでしょうか。」

男と女は、階段を下りていく。

「あれから…十年か。長いようで短いね。」

「何を言う。もし…もし、彼が生きていたのなら、許してくれませんか。絶対に。」

それを聞くと、男はメガネを直して言う。

「そう…だね。許してくれとも言いませんし、そうも思いません」

よ。僕たちはそうされて当然の事をしてきたのですから。所詮我らは罪深き者…せめても見届けねばと思います…これ以上は耐えられません。」

その時だった。真横の窓ガラスに巨大な影が映る。そう、それは…

「何っ!?!」

「博士っ!!」

その頃、荷物を警備していた武蔵とヴァイスも、敵に遭遇していた。

「何…ッ!?!ガジェットだど!?!」

「馬鹿な…こいつらは5年前に全滅したはずじゃ…!!」

その時、20mほどの大きさのガジェットから閃光が放たれる。吹き飛ばされる局員。その威力は、スターライトブレイカーに匹敵する魔導砲だった。

「畜生!!」

「囲まれたか…」

その時だった。

「武蔵さん!ヴァイス!!」

二人は視線を管理局の建物に移す。そこには、白衣の男がガジェットに囲まれながらも叫んでいた。

「何をしているんです！早く荷物を守れ！！いいですか、こいつらに絶対荷物は渡すんじゃない？ うわあっ！？」

小型のガジェットに飲み込まれる男。

「ユーノ！！」

その時だった。建物の天井が吹き飛び、その中から右腕が巨大なドリルになった、全身が真っ白のロボットが現れたのだ！！

「な…何だ、あのロボットは！？」

ロボットのドリルが、巨大なガジェットに突き刺さる。

「だが…」

「いくしかないか！！」

武蔵とヴァイスは、その隙にトラックに乗り込んで発進する！！ロボットのマニピュレーターには、さっきの白衣の男…ユーノが立っていた。

「さらばだっ！！後は頼んだぞ！！」

その瞬間、ロボットから閃光が走り、爆発が起こる。武蔵とヴァイスはバックミラーでそれを見た。

「み…見たか！あれは間違いねえ…リイン姐さんのゲッター2だぜ…！！」

そう言うヴァイスに武蔵は言う。

「あのカラーリングは…恐らくプロトタイプだ。だが、そんなことはどうだっていい。問題は、誰が乗ってたかって事だ。」

トンネルに入るトラック。そこから出ると、トラックの横をつけるように小型のガジェットの子型が数機追跡していた。

「チツ…来やがったか。」

「護衛の連中は何している！！おい！応答しろ！！誰でもいい！！」

本来、警備をしていた武装局員は、全員横たえていた。輸送トラックは横転し、静かに燃えている。そこには、青いボディースーツを着た女が立っていた。

「クソッ！！」

「なあ、ヴァイス。俺たちは、どうやらとんでもないものを運んでるらしいな…！！」

ヴァイスはストームレイダーを構える。

「チツ…ったく、たまんねえや！！」

魔力弾が放たれ、一機を撃墜する。全機撃ち落とすと、突然トラックに衝撃が走る！！ヴァイスが後ろを振り向くと、ガジェット？型が後ろのコンテナに取りついていていた。

「クソッ、AMFかよ！！」

AMFの影響で、ヴァイスはデバイスを使えない。そんなヴァイスを嘲るように、ガジェットはコンテナを壊して中の物を奪おうとする。と、その時だった。

「ヴァイス、ハンドルを代われ。バケモノに目に物見せてやる。」

「了解！！」

武蔵の座席がトラックの後ろへと消えていき、乗り込んだヴァイスがハンドルを握る。傷害の無くなったことを確認したガジェットが、その腕を伸ばそうとしたその時だった。

ギャラララララ！！！！

トラックのコンテナを突き破り、蛇腹状の二本の腕がガジェットに巻きつく。凄い力で締めあげられて、ガジェットの装甲はぐしゃりと潰れる。トラックの荷台からゆっくりと立ち上がる影。そう、それは…

「いくぜゲッター3！！へへ、その荷物は渡せねえなあ！！」

ガジェットを破壊するゲッター3！！遙か前方から跳んでくるガジェットに

「ゲッターアアアミサイイイイル!!」

直撃!! 爆発!! ヴァイスは華麗なハンドルさばきで、飛んできた破片を見事避ける。

「やりましたね、先輩!!」

「へへ、ざまあみろってんだ…何だ？」

武蔵は守ったコンテナを見た。ガジェットガジェットの攻撃で、少し壊れている。武蔵はゲッター3のカメラをズームしてその中を覗き込んだ。

「な……………?!」

それを見た瞬間、武蔵の顔は尋常じゃないほどに青ざめた。ゲッターチームの武蔵の手が、ガタガタと震えている。震えが止まらないのだ。

「せ…先ば……………!!?」

運転をしていたヴァイスは、一瞬目を疑った。暗い夜道に仁王立ちする漆黒の影。それは雷に打たれて一瞬だけその姿を現す。一瞬、そう一瞬だけで十分だった。真紅の甲冑を身にまとい、巨大な翼を広げるその姿は、まさに物語に出てくる魔王そのものであった。

「う…うわああああああ!!?」

必死にヴァイスがハンドルをきる!! 火花を上げながらトラックは急停止しようとするが、間に合わない。謎の影に突っ込んでいくトラック。ゲッター3の乗ったトラックを、奴は腕一本で軽々と薙

ぎ払う。攻撃的なデザインの外殻に対し、その一対の目だけは妙に生々しく、あたかも仮面をつけた鬼の様な恐ろしい形相を醸し出している。

「なんだ…なんだあいつは！？俺の…俺の知らない、ゲッターだとおおお！！？」

一瞬目が合ったのち、ゲッター3は崖に激突する。両目の光が消え、機能停止するゲッター3。その衝撃で武蔵は血反吐を吐くと、その場にうずくまって動かなくなった。

「ぐ…せ、先輩！？」

横転したトラックから、辛くも脱出したヴァイスはその惨劇を目撃して嘆いた。と、巨大な正体不明のロボットがガジェットを掴むと、両腕を引きちぎって地面にたたきつけた。爆発するガジェット。その時、ヴァイスの目の前にガジェットの奪ったコンテナが落ちてきた。

「なんだ…何が、何が一体どうなってやがる…！？」

意識が薄れていくのをヴァイスは感じた。ゆっくりと落ちていく。と、巨人のマニピュレーターがコンテナを拾い上げる。その中身を…ヴァイスは一瞬だけ目撃したのだった。

「なっ！！？」

落雷によって照らされる中身。それを見た瞬間、ヴァイスの世界は暗転した。

C h a n g e ! ! L y r i c a l N A N O H A T h e l a
s t d a y o f t h e W o r l d

燃え盛る炎。紅蓮の炎は、夜空をも赤く燃やしつくす。次々と倒されていく局員たち。そこには、無数のデウスⅡマキナがあった。

「敵戦力【ゲッターロボG】、第三防衛ライン突破しました。地上本部まで、あと5キロです。」

「補給を怠るな！このまま転進するんや！！」

八神はやては、モニターの前で焦燥に駆られていた。

「ゲッターロボ混成部隊、約6割が撃墜されました。ライトニング分隊エリオ・モンディアル三等陸士、意識不明の重症です。キャロ・ル・ルシエ三等陸士が竜を召喚しましたが、ゲッタードラゴン5機のシャインスパークによって撃破されました。二人の回収は済

んでいます。」

「勝つためには手段は選ばへん。今動いているゲッターは……！」
はやてはモニターを見た。

「ゲッターアアア……ビイイ……ム……！」

ゲッターライガーにゲッタービームが命中し、爆発する。地上本部の目の前では、ティアナ・ランスターのゲッター1と、スバル・ナカジマのゲッター3が孤軍奮闘していた。

「武蔵先輩直伝……！大雪山おろしイイ………っ……！！！」

スバルのゲッター3がゲッターポセイドンを高々と空中に放り投げる。落下してくるポセイドンにゲッターパンチをたたき込んで撃破する。一方ティアナはゲッタードラゴンのダブルトマホークブーメランをゲッタートマホークで切り払いながら、勝機をうかがっていた。

「そこだっ！トマホオオ……ク・ブウウ………メラン……！」

一瞬のすきを突いたティアナの攻撃は、敵のゲッタードラゴンの首を刎ね飛ばした。だが

『『Chain attack……！！』』

「づぐうつ……？」

硬直した隙について、一斉に放たれたゲッターライガーのチェンアタックが、ゲッター1を串刺しにした。

「ティア!?!」

ティアナをかばおうとするスバル。だが

『Getter beam!!』

ゲッタードラゴンのゲッタービームが、胸部装甲を焼き切る!!

『Getter cyclon!!』

同時に放たれたゲッターポセイドンのゲッターサイクロン。装甲が砕かれていくゲッター3。

「く…!!く、クソッ!!」

横転するゲッター3。そこには、背中のミサイルを高々と担ぎ上げたゲッターポセイドンが立っていた。

『Strong missile!!』

「う…うわあああああああ!!?!」

ストロングミサイルの直撃を受けたゲッター3は、大爆発を起こした。

「スバルウウウウウ!!?!く…!!」

腕を、足を、腹を寄つてたかられてもがれていくゲッター1。ゲッタードラゴンがゲッター1の首にダブルトマホークで切りつけ、首を切断する。地面に叩きつけられるゲッター1の頭。それを容赦なくゲッタードラゴンは踏みつぶした。

「くるな…ぎゃあああああああ！！！」

断末魔と共に、ティアナとの通信は途切れた。

「く…スバル、ティア…！！」

デスクに拳を叩きつけるスバル。そこに、管理局の映像をジャックして一人の男が割り込んできた。

「ククク…ハハハハハ！君たちの持っているゲッターロボも、あと二機だ。無駄な勝負はやめたまえ。」

「ク…スカリエツティ！！」

彼は、ジェイル・スカリエツティ。ゲッターロボ軍団を指揮し、時空管理局をたった一人で壊滅寸絶まで追いやった男だ。顔のいたるところに生々しい傷のあるこの男は、不敵な笑みを浮かべた。

「お前たちは何時もそうだ。自分たちの無力さに気付こうともしせず、すぐに他の何かのせいにする。さあさあ、次の言い訳は何か？管理局が質量兵器を持ってないから？よく言うな、ゲッターロボを持っているくせして。エース・オブ・エースがいない？あんな蚊トロボと一緒にするな。ほら、言い訳を考える事は時空管理局の十八番ではないのかな？八神はやて君。だから君は…兄同然の男を死に追いやったのさ。」

「!!!?」

スカリエッティは嗤って言う。

「フン、その首に巻いてるのは彼の遺品か？馬鹿馬鹿しい、そもそも君たちが彼の真意に気づいていち早く行動していれば、彼は死なずに済んでいたのではないのか？」

指令室を突き破って、ゲッタードラゴンの進化形のゲッターD2が侵入してくる。そこには、銃を構えたスカリエッティがいた。

「グッバイ…裸の王様!!」

はやての胸から血が噴き上がる。目を見開いたまま、あおむけに倒れるはやて。スカリエッティはゲッターを降り、はやてに近づいた。動かなくなった彼女の顔に唾を吐きかけると、彼ははやての顔を蹴り飛ばした。

「動かない…ああ、死んだか。」

つまらなさそうに言うスカリエッティ。

「人間とはいつもこうだ。口先だけは偉そうなことを言って、すぐに壊れてしまう。フフフ…だから私は造り上げた。壊れない人間を…戦闘機人を!!」

スカリエッティは、指令室から管理局全施設に向かってしゃべった。

「ハハハハハ！見ろ、この八神はやての無様な姿を！！これが君たち下等な遺伝子を持つ者の末路だ！！私は人類の遺伝子の選別をする。これからの時代に弱い人間の生きていく資格などない！！強い部分を埋め合わせ、造り上げた、新人類こそが宇宙を制するのだ！！さあ、世界最後の夜明けに懺悔せよ、神に見放された人々よ！！フフフフ…あきや、あひやひやはやひやはやひやはやああ！！！！！！」

狂ったように嗤いだすスカリエッティ。彼の言う世界最後の日の意味とは！！そして、人類に明日はあるのか！！残された時間は、後少ししかない…………

チェンジ！！

真リリカルなのは 世界最後の日

これで 最後だ

チェンジ1 誕生！！新たなる翼！

時はさかのぼる

新暦71年4月29日 ミッドチルダ北部臨海第8空港

気がついたら、あたりはまさに火の海。

炎のにおいが染みついて、むせる。

足の痛みをこらえて、あたしは一步、また一步と踏みしめる。垂れてきた血が目に入り、世界が赤く見える。それは、あたしをえもいえぬ不安につき落した。地獄。そう、ここは地獄だ。血と硝煙のにおいと赤い世界は、この世の地獄というものを体現していた。

「…………お父さん…………お姉ちゃん……………」

開けた場所で、膝を付いてしまう。熱気が、硝煙が、体力を奪っていく。目に血が入って、辺りが良く見えない。涙が、ぼろぼろと零れてきた。むせかえる煙と死の恐怖によって。

「痛いよ…………怖いよ…………こんなのやだよ……………！！」

弱音が自然と口から漏れる。小さい頃から、あたしは弱かった。痛いのか、怖いのか…逆に相手にそうさせるのも嫌で、泣く事しか出来なくて。そんなときに、いつもギン姉ばかりに助けてもらっていて。

「帰りたいよ……………」

女神像の前に手をついて、情けなく泣く事しかできなかった。

「…………誰か…………誰か助けて……………!!」

その時、あたしの後ろで、ミシミシと何かが圧迫される音がした。ばつと振り向いて顔を上げると、女神像があたしに倒れ掛かっていた。

「やだ…やだ、やだやだやだ!!」

逃げようにも、疲れ切った体は動かなかった。それだけでなく、死の恐怖に体がこわばっていた。優しい女神の顔が、あたしには悪魔に見えた。

『あの人』が現れたのは、その時だった。

「ゲッタアアアーーーーービイイーーーーーム!!」

顔を上げると、倒れ掛かっていた女神像を、赤い閃光が消し飛ばした。その光が飛んできた穴に、落下してくる巨大な真紅のロボット。ロボットと私の目が合う。すると、ロボットの口の部分が開いて、白いバリアジャケットの、『あの人』が私のもとに飛んできた。

「よかった…間に合った!!」

かなり急いでいたのか、肩で息をしていた。『あの人』は、真剣にだけ安心させるような表情であたしを見つめて、言った。

「助けにきたよ…!!」

その表情が、その声が、どれだけあたしに希望を与えた事か！！
長い栗毛色の髪が翻ったと思うと、『あの人』はあたしの目の前に
佇んでいた。その背中は、とても大きく見えた。そしてあたしの頭
に手を置いて笑ってから、

「良く頑張ったね、偉いよ……もう大丈夫だからね。フェイトち
ゃん！ヴィータちゃん！ここは私に任せて、ゲッターを発進させて
！！」

ふわりと浮きあがったかと思うと、ゲッターと呼ばれたロボット
は夜空に消えていった。

「あ……………っ！！」

優しい言葉に、また涙が溢れてくる。『あの人』はもう一度笑っ
てから、杖を天上に向けた。

「安全な場所まで、一直線だから！」

その姿は、とても綺麗で、かつこよくて、臆病だったあたしなん
かとは大違いで、

『I confirm upward security.』

相棒のデバイスが声を発すると、『あの人』は魔法陣を展開した。

『I remove a firing ring lock.』

「一撃で地上まで行くよ！」

『All right, A road cart ridge!!』

集束していく光。『あの人』は力強く…

「デイベイイイン……」

叫んだ。

「バスタアアーーーーーッ!!!!」

その後のことは、少し曖昧だ。ただ、あたしを抱えている『あの人』が、優しく笑いかけてくれたのは、はっきり覚えている。

街の光のせいかもしれない。はたまた炎のせいかも知れないけど、それでも…その笑顔がとてもまぶしくて。

だから、いいなって。この人みたいに、強くて優しい人になれたらなって。本当に単純なことだけど、心からそう思ったんだ。

チェンジ！ 誕生!!! 新たなる翼！

新暦0075年4月、ミッドチルダ 臨海第8空港近隣、廃棄都市街

廃墟の街の一角に、二人の少女がいた。一方はボーイッシュな青髪少女。徒手での素振りを行っていることから、戦闘スタイルは格闘だろう。汗が光り、キレのいい蹴りが風を斬る。

もう一方は、橙色の髪を二つに結び上げた、ツインテールの少女。自身の銃に弾を込めながら、メンテナンスをしていた。

すると、ここでその少女が、素振りを行っている少女に顔を向けて言った。

「スバル、あんまり暴れてると、試験中にそのオンボロローラー逝っちゃうわよ？」

「うえー……ティア、やなこと言わないで、ちゃんと油も差してきた!!」

ボーイッシュな少女 スバルは素振りを中断させると、自信満々の表情で、ツインテールの少女 ティアナに反論した。手には黒と赤に輝く、にくいアイツが握られていた。

ティアナは素っ気無く言い返し、スバルを無視して再び作業を再開する。スバルも、どこか納得いかないような表情で、ストレッチを始めた。自分で振っておいて無視はいくらなんでも酷いではないか。スバルは不本意であった。

一段落ついたので、ティアナは時間を確認する。すると、アラームが鳴り響いて、ティアナの時計とはまた別の、大きなウィンドウが開いた。

二人が反応し目をやると、10歳ほどの幼い女の子が写っている。だが、少女の纏っている服装を見て、二人は背筋を伸ばした。

「おはようございます！さて、魔導師試験受験者さん二名、そろってますか？」

「はい！」

二人が返事をする、モニターの向こうの少女は、書類を手に取り、言う。

「確認しますね。陸士386部隊所属の、スバル・ナカジマ二等陸士と……」

「はい！」

「ティアナ・ランスター二等陸士！」

「はい！」

威勢のよい返事に、少女は笑った。

「所有している魔導師ランクは、陸戦Cランク、本日受験するのは、陸戦Bランクへの昇格試験で間違いありませんね？」

「はい！」

「間違いありません」

すると少女は書類をしまい、背筋を伸ばし、敬礼をして言った。

「はい！本日の試験監督を務めますのは、私リインフォース？空曹長です、よろしくですよー！！」

「よろしくお願いしますー！！」

二人は、リインフォース？に敬礼を返した。

「あー…それと、今日はそのデバイスはいらないです。今日の試験は、これに乗ってもらうのですよ。」

リインフォース？が指をさす。その先には

「あれって…」

「ゲッター…ロボ…？」

ところどころ装甲が欠けている、使い古されたゲッターロボ…その空戦形態のゲッター1が立っていた。

ゲッターロボ

新暦67年のガジェット戦争で活躍した、時空管理局の誇るスーパーロボット。元は災害救助用として建造されたが、未知の敵の襲来に際し、急きょ戦闘用として開発された。新エネルギーのゲッター線によって駆動し、三機のゲットマシンが合体する事によって3

タイプのロボットに変形する。空中用のゲッター1、陸上用のゲッター2、そして海中用のゲッター3。たった一機で、あるとあらゆる状況に対応できる、優れたロボットである。だが、問題は操作性であり、不慣れなものが合体したりすると事故を起こしかねない。実際にゲッターロボに乗って「戦える」魔導師は、ごくごく少数に過ぎない。

「本物：ですか？」

「はい！武装のついていない練習機とは違う、正真正銘の本物なのですよ」

イーグル号の部分：ゲッターの口の部分が開くと、コクピットが複座式になっていた。

「二人とも陸戦なので、オープンゲットとゲッターチェンジは危険なので禁止なのです。この試験は、全てゲッター1でクリアしてもらいますよ。あ、でも操縦の入れ替わりは許可されています。そのためにコクピットを改造しているのですよ。」

右にティアナ、左にスバルが搭乗する。ティアナは不満を漏らした。

「…試験官。いくら私たちがテストパイロットだとしても、いくらなんでもこのオンボロゲッターは無いんじゃないんですか？どう見てもスクラップ寸前ですよ。ちゃんと動くんでしょうね？」

「ティ、ティア！！」

ティアナが怒るのも無理もない。ガタのきている乗機では、いつ

事故が起こるか分からないのだ。こんなつまらない事でもし死んでしまったら悔やみきれない。ティアナの剣幕にビビったリインフォース？は、涙目でオドオドしていた。

一方その頃 試験会場上空

「なんやなんや、あの騒ぎは。」

ヘリコプターから身を乗り出して、三人の様子を見ている女性がいた。風にボロボロの真紅のマフラーがなびいている。

「はやて、ドア全開だと危ないよ？モニターでも見られるんだから。」

「はあ〜い…」

真紅のマフラーの女性 はやては苦笑いしながら返事をして、座席についた。はやてに声をかけた女性 フェイトは、モニターを開き、続けて資料も開く。

「この二人が、はやてが見つけた子達だね？」

「うん、二人ともなかなか伸び代のある、ええ素体や。」

「今日の試験の様子を見て、いけそうなら正式に引き抜き？」

「うん、直接の判断は、教導官に任せてるんやけどな…」

「そっか……うん？」

ふと、フェイトは疑問を浮かべた。

「どうしたん？」

「いや、六課にくる教導官のこと、何も聞いてないなって思って……」

「ああ………」

はやては、ばつが悪そうに頭をかいて言った。

「実は、うちも何も聞いとらんよ。」

「…………え？」

ぽかんとするフェイト。はやては言った。

「書類の手違いで、教導官が来なくなっけしもうたって事態は、もう知っとるやろ？」

「うん。でもミゼット提督のお陰で難を逃れたんだよね？」

「せや。けど、その教導官本人の希望で、素性は全く明かされとらんよ。」

「そ、そうなの!？」

驚きのあまり身を乗り出すフェイト。はやてはそれを制して言った。

「今日、リインと一緒に試験官してるらしいから、多分会えると思うんやけど……………」

と、モニターに目をやったその時だった。

『は、はやてちゃん……ん…助けてです………』

泣きそうな顔のリインのどアップが飛び込んできた。

同時刻 廃屋

『There are not a life reaction, the reaction of dangerous materials in a range. It is the course check end.』

「……………」ご苦労さま。」

ウィンドウを操作していた女性は、モニターを開いてコースの情景を映し出した。

「観察用のサーチャーも、攻撃対象のオートスフィアも設置完了。」

では、G3もスタンバイに入ってください。」

『了解だ。』

モニターに映し出されるスバルとティアナ。それを見て、女性は微笑んだ。

『……………起動実験は、昨日私と後二名が行った。動作に不備は無いはずや、外見がアレやけどな。反撃に気をつけつつ、制限時間内にゴールを目指してや、何か質問は?』

「えつと……………ありません!」

「同じくありません!」

はやての問いかけに、二人ははつきり返事をする。

「では、スタートまであと少し、ゴール地点で会いましょう!ですよ!」

メンタルの復活したリインの声とともにウィンドウが消える。と同時に、合図をしめす画面が現れた。

「では、いくですよ!3・2・1……」

「「ゲッターロボ…発進!!」」

「お。はじめったみてえだな。」

廃棄都市の一角に、一機のソレは佇んでいた。

『あー…少々手加減してな。』

「わかってるさ、はやてちゃんよ。でも…」

整備員の制服を着た男性は、モニターの向こうで発進したゲッター1を見つめ、目を細めた。

「手加減は要らねえみてえだぜ?」

そういつと、彼は帽子をかぶりなおして顔を両手で叩いた。

「よし、ヒヨッコどもに目に物見せてやるかぁ!!」

「ゲッターアアーーーーー・トマホオオーーーーーク!!」

近くの敵を切り刻みながら、ゲッターは直進していく。操縦をしているのはスバル。非破壊対象をうまく避けつつ、確実に破壊対象を攻撃していく。

「遠い…ティア!!」

「わかったわ!ゲッターアアーーーーマシイイーーーーンガンッ!!」

遠くのターゲットは、ティアナの射撃によって撃墜していく。しばらく爆発音が響いていたが、やがてそれも止み、中継ポイントでゲッターは空に飛び上がった。

「いいタイム!」

「当然!」

「ほう…悪くは無いな。」

タバコを吸う銀髪の女性は目を細めた。

「いや、まだまだだな。動きが雑だぜ…あつ！また食らってんじやねえか。」

整備員の男は女性に言い返す。

「フフ…だからこそ育てがいがあるものであるうつ？」

女性は笑うと、再びモニターに目をやった。

「だが、難関はまだ続くぜ。」

「…そうだな。」

女性が手を振ると、もう一つウィンドウが開いた。

「特にこれが出てくると、受験者の半分以上は脱落することになる。試験の最終関門、大型オートスフィア…という名目の。」

「そうだ。今の二人のスキルだと、普通なら防御も回避も難しい、中距離自動攻撃型の大型スフィアの設定だっけな、リイン。へへへ、知恵と勇気の見せ所だぜ。」

嬉しそうに男は空を見つめた。

廃棄都市を駆ける、スバルとティアナの駆るゲッター1。前方には、敵の大群がいる。だが

「いくわよ、スバル!!」

「もちろん!ティア!!」

怯むことなく、挑みかかる。

「ゲッタアアアーーーービイイーーーーム!!」

チェンジ2 突撃！！ゲッター1対ゲッター3！

スフィアから浴びせられる、集中攻撃。しばらく反撃していたゲッター1だったが、一度ビルの陰に隠れた。そこからのティアナの射撃により、少しずつだが確実にターゲットを破壊していた。

「耐久度は83%…ティア、大丈夫？」

「問題ないわ。スバルこそいける？」

「当たり前！」

この試験では、ゲッターのダメージが耐久度として検出される。100%でスタートし、被弾すると耐久度が減っていくという寸法だ。0になると、その場で試験は不合格となる。

「よし、全部クリア。」

「この後は？」

上を見上げると、無数のスフィアが待機している。ここからは空戦の試験だ。

「うようよいるね。」

「チッ、目障りね。このまま上がったら、集中砲火の直撃を喰らうわ。ゲッター使って、クロスシフトで瞬殺！やるわよ？」

「りょーかい！！！」

デバイスにカートリッジを込め終えたスバルは、サムズアップをした。

チェンジ2 突撃！！ゲッター1対ゲッター3！

スフィアが漂う上の階。激しい音を立てながら、ゲッターマシンガンを発射して飛び上がるゲッター1。スフィアを次々と破壊していくが、全て破壊し終わる前に弾が尽きた。弾切れの銃を捨て、ゲッターウィングを体に纏って突撃する。それに反応したスフィア達は、狙いを定めると同時にチャージを開始する。ゲッターが接近すると同時に、大くなる光の密度。

ズワオオオオオ

凄まじい音を立てて、ゲッターに魔力弾が容赦なく浴びせられた。
だが

「あ……………！？」

直撃を喰らったゲッター1！！だが、攻撃を喰らっていたのは、パージされたゲッターウィングだけだった。二人はどこに！？はやとフェイトが探している頃、廃屋にいた女性は、今まさに刻まれている軌跡を見ていた。

5

空に青い螺旋の光が走り、次々と破壊されていくスフィアたち。

4

見えない敵の攻撃で、機体到大穴のあいたスフィアは、狂ったように動き回り、やがて機能を停止させ爆発する。

3

炎の中で揺らめく影。それが人を形どっていく。

2

炎から現れたスバルは、デバイスにカートリッジを装填し、大きく右手を引く。同時に、彼女を察知したスフィアが攻撃を開始する。スバルは回避しながら、様子を見る。

1

「でりゃっ！！」

跳躍。スバルは宙に舞った。だが、空中では方向転換する事が出来ない。一斉にロックオンするスフィア。だがそれを見た時、スバルはにいつと笑った。

0

「
ティ
ア
！
！」

「分かってるわ！クロスファイアアアアアア……」

「リボルバァー……」

地表付近の景色が揺れ、そこから大地に立つゲッターロボと、その頭の上に立つティアナの姿が現れた。

「「シュウウーーーーーッ！」」

地上と空中から放たれた魔力弾が、スフィアを一掃した。地上のゲッターに帰還するスバル。フェイトとはやても感心していた。

「なるほど、これは確かに伸び代がありそうだね。」

「やる?」

へりの中、フェイトは、はやてに微笑んだ。はやても微笑み返して、モニターに目を戻す。

「へっ、やるじゃねえか。」

「そうだな…さて、次は最終関門だ。武蔵、後は任せた。」

リインフォースは、局の車で去っていく。武蔵は遥かかなたから来るであろうその影を睨みつけていた。

「よっし!さすがだよティア!一発で決まったね!」

「ま、あんだだけ時間があればね。」

ゲッターの頭上に立つ二人。スバルは残ったターゲットを破壊し、ティアナはデバイスにカートリッジを再装填している。

「普段はマルチショットの命中率あんまり高くないのに。やっぱティアはすごいなあ…」

「うっさい。さっさと片付けて、次に……ッ!」

突然ティアナの言葉が遮られ

「スバル、かわせ!!」

「!？」

ティアナの声で、とっさに飛んだスバル。スバルの足もとには、黒い焼き跡が刻まれていた。先ほどの攻撃で、破壊し損ねたスフィアがあつたようだ。ティアナがスフィアを目で追いながら、狙いを定めた瞬間。一瞬ティアナがよろける。直後、足元から鈍い音がした。

「がつ!？」

体制が崩れるものの、ティアナはデバイスのトリガーを引いた。

「当たれえっ!!」

「ティア!クソツ、くらえ!!」

スバルが魔力弾を撃つのと、ティアナが弾丸を撃つのはほぼ同時だった。ティアナの弾丸はゲッターの角にあたり、角度を変えてスフィアのどてつばらに風穴を開ける。一方スバルの放った魔力弾は…

へり

「ん…?なんや?」

突然、モニターの映像が砂嵐になる。あせるはやてとフェイト。

「サーチャーに流れ弾が当たったみたいだけど……？」

「だ、大丈夫かな……？」

廃屋

「あつ……ダメね、完全に壊れてる。」

女性は爆発の起こる空を見上げる。

「うーん……万が一のときは、ゲッターチームが二人もいるから大丈夫だろうけど……行った方がよさそうね。」

そういうと、女性は空に舞い上がった。

「ティアア……？」

「騒がないで！何でもないから………！！！」

うずくまるティアアナに駆け寄るスバル。彼女は何とかゲッターのコクピットに運び入れると、若干のうるたえが見えるティアアナに叱責した。

「嘘つけっ！明らかにやばい音が鳴ったよ！？捻挫したでしょ！！！」

「だから何でもないって……ッ!!」

痛みに顔をしかめるティアナ。スバルの言うとおり、足を痛めたらしい。コクピットから立ち上がろうとしたティアナは、すぐにふらつき座り込んでしまった。

「…………ごめん、完全に油断してた。」

「あたしの不注意よ。あんたに謝られると、かえってむかつくわ。」

自分の足をじっと見つめるティアナ。彼女は諦めたようにため息をついてから言った。

「…………走るのは無理そうね。最終関門は抜けられない。」

「ティア…………」

最終関門の100メートルは、ゲッターから降りて走らなければならない。タイム的に、今のティアナには不可能であった。スバルは暗い表情で、ティアナを見つめる。

「あたしがゲッターに残ったままサポートするわ。そしたら、あんた一人ならゴールできる…………」

「そんな!? それじゃ、ティアが…………!!」

「うつさい!!」

ティアナが、声を張り上げた。その目には、うつすら涙が浮かんでいた。それは痛みによるものか、それとも…

「次の受験の時は、あたし一人で受けるつつてんのよ!!」

「次つて……半年後だよ!？」

スバルの言葉に、ティアナは鼻で笑って言う。

「ハッ！迷惑な足手まといがいなくなれば、あたしはその方が気楽なのよ!! わかったらさっさと……ッ!!」

また立ち上がろうとするティアナ。しかし、まだ痛むのか、座り込んでしまう。スバルは、まだ暗い表情で彼女を見つめていた。

「時間が無いわ！早く!!」

「…ティア…」

ティアナは苛立った声で促すが、スバルは口を開いた。

「あたし、前に言ったよね？弱くて、情けなくて、誰かに助けて貰いっぱなしな自分が嫌だったから、管理局の陸士部隊に入ってた。」

黙って耳を傾けるティアナ。スバルは言う。

「魔導師を目指して、魔法とシューティングアーツを習って、人助けの仕事についた。」

「知ってるわよ……何百回でも聞かされたんだから、嫌でも覚えるわよ。」

ティアナは、そう言っている割にはあまり嫌な表情をしていない。
むしろ……

「ティアとずっとコンビだったから、ティアの夢とか、魔導師ランクアップとか昇進に、どれだけ一生懸命かも、よく知ってる!!」

「……だから、何？」

ティアナから視線を逸らすこと無く、スバルは告げた。

「あたしの目の前で、それをつまづかせるなんて、そんなの嫌。」

「じゃあどうするのよ!? 走れないバックスを抱えて、残りちよつとの時間で、どうやってゴールすんのよ!？」

するとスバルが、いたずらっぽく笑った。

「……裏技。反則取られるかもしれないし、下手すりゃあたしたち二人まとめてミンチだけど……うまく行けば、二人でゴールできる!」

「……ミンチ? 随分と物騒ね……でも、本当?」

問いかけるティアナ。スバルは途端に自信なさ気に明後日の方向を見ながら、

「いや、結構難しいし、ティアにもちよつと無理させるかも知れ

ないけど……よく考えると、一步間違ったら確実に死ぬし……」

うじうじと考え込むスバルに、ティアナの堪忍袋の尾が切れた。

「だあああっ!!もう!鬱陶しい!何でこついつ時にうじうじすんのよ!?ハッキリしなさいよ!」

「ふにやつ!?!」

スバルの胸倉を掴み、顔をぐいっと近づける。

「はつきりしなさい!やるのか、やらないのか!?!」

「……………」

ぽかんとするスバル。だが

「…二人でならやれる、手伝って、ティア。」

「…………残り時間、3:40」

ティアナは手を離し、スバルに時間を教えた。そして彼女を見つめた。

「プランは?」

「……………うん!」

最終ポイント

「へっ、馬鹿がこのこ出てきたぜ。」

モニターが、道路を走る人影を認識する。武蔵は操縦桿を握り、前方から飛来するゲッター1をロックオンする。最終関門の大型スフィア。その正体は…

「いくぞ、ゲッター3!!」

巴武蔵の駆るゲッター3だった。

「ティア!? あれは…ゲッター!?!」

スバルは前方から出てきた敵・ゲッター3に驚きを隠せなかった。

「なるほど…こいつがラスボスってわけね。いくわよ、スバル!」

「OK! ティア!!」

直進してくるゲッター1。ロックオンを完了した武蔵は、レバーを前に倒す。

「食らえッ! ゲッタアアアアミサイイイイイル!!」

ゲッター3の両肩に装備されているミサイルがせり上がり、水平に倒れる。発射されたゲッターミサイルは、真っ直ぐにゲッター1に向かう。しかしゲッター1の反応は遅く、直撃を喰らってしまった。

「ああ！直撃！？」

へりの中、思わず身を乗り出すはやて。

「む…武蔵さん！？」

武蔵に何か言おうとするフェイト。だが、武蔵はにいつと笑った。

「いんや…はずれだ。」

ゲッター3のモニターには、直進を続けるゲッター1の姿があった。ゲッター3はジャガー号に搭載されている機関砲・ゲッターバールカンで応戦するが、ゲッター1はかわしていく。

「高速回避！？ゲッター2でもないのに…」

「あの子たち、スバルとティアナは…」

思考をめぐらせるはやてに、フェイトは解説をした。

「野郎！食らえってんだ！！」

ゲッター3の攻撃が、再びゲッター1に直撃する。だが次の瞬間、4、5対ほどのゲッター1が出現した！！

「な…なんだと！？ええい、全部叩き落としてやる！！」

「……………フェイクシルエツト。これ、滅茶苦茶魔力食うのよ？あんまり、長く持たないんだから……」

コクピットの中のティアナが魔方陣を展開し、集中していた。

「一発で決めなさいよ？でないと、二人とも落第なんだから！」

「……………分かってる。」

スバルは、じつと前を見つめていた。

「…来る！！」

「おりやああああ！！ゲッタアアアアアアアアムツ！！」

蛇腹状に伸びるゲッター3の腕が、分身を薙ぎ払っていく。一瞬で分身が消えてなくなってしまった。ティアナは舌打ちをする。

「チツ、いけえええええ！！」

ゲッタートマホークを構えて、投げつけるティアナ。ゲッター3の頭部に命中する。

「く…やるな、畜生め！！」

「もらったああああッ！！」

ゲッタートマホークで斬りかかるティアナ。だが、武蔵は後方に

急バックしてかわすと

「うっおおおおおおー!!」

「何!？」

全身を締め付けるゲッターアーム。ギリギリと締めあげられるゲッター1。そう、これはゲッターロボのスペックにはない技。この世界で巴武蔵しか使えない、ゲッター3の必殺攻撃。それは

「必殺!!大雪山おろしいiiiiiiiiiiiiiiii!!」

高速回転しながら、空に打ち上げられるゲッター1。耐久度が見る見るうちに削られていく。

「5...52%まで持つて行かれた!？まずい!!」

「とどめだあつ!!ゲッタアアアアミサイイイイイイイ
!」

落下するゲッター1に、追撃のゲッターミサイルを放つ。その時、一瞬だけゲッター1のコクピットが開いた。すぐに閉じると、ゲッターは落下しながら、ゲッタートマホークを手につ。

「甘いわっ!!」

二発のゲッターミサイルを、当たる直前で切り払うティアナ。近くのビルにトマホークを突き刺すと、両手で持つて落下のスピードを落とす。何とか地面への激突を避けたゲッター1だったが、着地した直後にゲッターバルカンとゲッターミサイルの直撃を喰らう。

吹き飛んでいく左の角。耐久度は30%を切っていた。

「も、もたない！？くっ…！！」

モニター越しに、ゲッター3を睨みつけるティアナ。だが、隣の操縦席には誰も乗っていなかった。

ビルの屋上

その頃スバルは、ビルの屋上からゲッターの様子を見ていた。大雪山おろしを喰らって落下する最中に、スバルだけ飛び下りたのだ。ゲッターが無ければ試験にクリアする事が出来ないだけであって、試験中に降りる事はルール違反ではない…と、ティアナが教えたからだ。

明らかに押されているゲッター1。角が欠け、試験官に外見からわかるように、人工的な黒煙が噴き出している。後一撃でも喰らえば、全て終わりだ。

（あたしは空も飛べないし、ティアみたいに器用じゃない。遠くまで届く攻撃ならあるけど、限界はある。出来るのは…全力で走る…ことと、クロスレンジでの一発だけ…！）

ベルカ式の魔方陣を展開し、スバルは目の前を見据えていた。

「だから！」

魔方陣の光が強くなり、ナックルのリボルバーは風を纏い、火花が散る。

「決めたんだ……『あの人』みたいに、強くなるって。」

閉じていた目を開けて、顔を上げる。

「誰かを助けてあげられるような、強い自分になるんだって!!」

拳を振り上げて、地面を殴りつけた!!

「ウイングロード!!」

蒼い光の道が、ゲッター3の背後に突き刺さる。

「何!!? 野郎っ!!」

武蔵がゲッターミサイルをスバルに発射しようとするが

「させるかあああああ!!」

武蔵の注意が一瞬それた隙に、腹のビーム砲をティアナは開く。
収束していくゲッターエネルギー。

「ゲッタアアアーーーーービイイーーーーーム!!」

ゲッターミサイルの発射を中止し、防御態勢をとるゲッター3。
両腕でゲッタービームを防ぐ。

「ちっ…クソッたれ!!」

ウイングロードを走るスバルに、ゲッターバルカンを撃ち込むゲッター3。だが、次の瞬間

「消えた…まさか!？」

そう、ウィングロードを走るスバルは、フェイクだったのだ!？
なら、本体は何処に? 武蔵は辺りを見渡す。と、その時だった。

「うおおおおおおおっ!！」

雄叫びを上げて、ゲッター3の右横のビルの壁が吹き飛ぶ。ゲッター3の周囲を包むウィングロード。ゲッター3はゲッターミサイルをスバルに向かって発射するが、スバルはありったけのカートリッジをロードして加速する。ゲッターミサイルをかわしたスバルは、ゲッタービームを喰らって動けないゲッター3の周囲を走る。翻弄されるゲッター3。そしてスバルは、ゲッター3の両目の部分…つまり、コクピットに突撃した。

「な、なんだと!？」

一瞬、スバルと武蔵の目が合う。

(あれ…? この人、どこかで…だけど!！)

「一・撃・必・倒!！」

煙を噴き上げるリボルバー。その拳にリング状の魔方陣を纏い、魔力を集束していく。

「デИБァイイイイイイン…」

それを拳に乗せて

「バスタアアーーーーーッ!!!」

スバルの拳と共に放たれたデイベインバスターは、ゲッター3の
コクピットを突き破って、パイロットの武蔵に直撃する!!

「ば…馬鹿な…俺が…!?!」

光に包まれる武蔵。そこに、彼の帽子が舞い上がった。

ゴール地点前

「お!来たですね!」

ラインが見つめるさきに、ボロボロのゲッター1があつた。

「あと何秒!?!」

「13秒!!くっ…間に合わない!!」

「ゲッター1のスピードに賭けるよ!!」

スバルに答えると同時に、ティアナは残りのスフィアをトマホークブーメランで薙ぎ払う。

「はい！ターゲット、オールクリアです！！」

目の前で最後のターゲットが壊れたのを確認し、リインはオールクリアを宣言した。だが

「あと10秒か…かわいそうだけど……」

フェイトがうつむいた…その時だった。

10

「いくわよ、スバル！！」

急に加速するゲッター1。顔を下にして地面と平行な姿勢をとると、コクピットが開いた。

9

「いっけええええええええええ！！」

突然、急停止するゲッター1！！慣性の法則で、凄まじい速さで飛び出す何か。それは、ティアナを背負ったスバルだった！！

「う…嘘やろ？」

はやては目が点になった。

「おおおおおりやあああああああ！！！！」

凄まじい加速のついたスバルは、傾いた高層ビルの上にスライディングする。二人の通った後には、割れたガラスが水しぶきの様に噴き上がり、空を彩る。

「イヤッホー！！この春一番のビッグウェーブね、ティアア！！」

妙にテンションの高いスバル。それに比べてティアナは顔が真っ青になっていた。

「……………ちよつとスバル。当然だけど、止まる時のこと考えてるでしょうね……………」

それにスバルは、笑顔で

「……………全然」

「ハア！？ちよつ、ぎゃあああああああ！！」

爽やかな笑顔のスバルに、悲鳴を上げるティアナ。

「あ、何かちよいやばです……」

苦笑いのラインに冷や汗が垂れる。あれ？今の自分の位置って進路上じゃ……

「ぎゃあ。」

ベリベリグシャアア

「リイイイイイイン!!」

スバルに轢かれたリインには、モザイクがかかっていた。

「うぁ…首が取れてる…」

「骨が飛び出てるね…あ。そんな事よりも！」

そうこうしている間に、二人はゴールラインを通過してしまった。しかしスピードを殺しきれないらしく、凄まじい勢いで壁にぶつかっていく。

「ウフ、ウフフフ…ねえ、スバル。帰ったらどすこい喫茶ジュテームでパーティーしましょ…」

「なんかティアが変なユメ見てるーーーー！そしてさりげなく死亡フラグ立ててる！しっかりしてよティアって、あ、まずい、何か死ぬ…あ、あははは…」

乾いた笑みを浮かべるスバル。

「あたしって…ほんとバカ…」

だが、その時だった。

「…………アクティブガードとホールディングネットね。」

女性が手を上げると、桜色の爆発が発生した。

「ちょお待ちい！あの光！？」

二人を助ける為の魔法を発動しようとしていたはやてが、その光を目の当たりにして、驚愕した。

「こんなの、絶対おかしいです……」

モザイクがかかったリイン（？）が、寂しそうにつぶやいていた。

「……………っえ？」

スバルが目を覚ますと、世界がさかさまになっていた。一瞬混乱したが、直前の記憶を思い出し、飛び起きる。周囲を探すと、サンゴのような柱に引っかって吐いているティアナを見つけた。

「おうええええ……………」

その美麗な顔からは似合わないような声を出していたティアナは、物凄く残念な子だった。

「二人とも！危険行為で減点です！！それとリイン、リアル死ぬところだったのでよ！！」

ほっとするのも束の間、叱咤の聲が上から飛んできたが……

「頑張るのはいいですが、怪我をしたら元も子もないですよ！？」

呆けてしまった。あのティアナですら、ぼかんとしている。

「そんなんじゃ、魔導師としてはダメダメです！ダメダメ人間の代表です！そんな人は、額に肉と書いてやるのですよ！！」

（に…肉ううううう！！？つつかちつさ！？）

階級的には上とはいえ、そう思わざるを得なかった。なんたつてフィギュアサイズの包帯グルグル巻きの何かが怒っていたのだから。

「あの…」

「何なのですか？」

復活したティアナは、恐る恐る言った。

「それって…第一話の鉄人28号のコスプレですか？」

「うーん…いいとこ突くけど違うのですよ。ビッグオーのシュバルツバルトのつもりだったのですよ…」

微妙に仲の良くなった二人だったが、スバルは会話に参加できなかった。

「はいはい、その辺でおしまい。」

手を叩く音。スバルが見上げると、真っ白なバリアジャケットを纏った女性が、空にいる。彼女はゆっくりとこちらに向かって降下し、ラインの隣に降り立った。

「最後のは確かに誉められたものではないけど、とりあえず後回し。」

ただ一人、スバルだけが女性を見つめて呆然としている。

「まずはお疲れ様。試験は終了だよ。」

スバルは女性を見つめて、口から声を絞り出すようにして言った。

「なのは…さん？」

そこに立っている女性は、高町なのはその人だった。

チエンジ3 集結！！新部隊誕生！

あたしがあこがれた『あの人』は、あの時と何一つ変わっていないな
かった。ツインテールにしている髪に、真っ白なバリアジャケット。
ふんわりとしたスカートに、胸についている赤いリボン。かわいい
…と思ったのは内緒。

杖の形の愛機は、あの時と全く変わっていない。可変式のインテ
リジェント・デバイス。表情はとても優しく、だけどどこかあた
しと遠くにいそう…優しさと厳しさを併せ持つような、そんな雰
囲気だった。

「ランスターニ士。」

「え、あ、はい！」

「怪我してたでしょう？見せてくれない？」

「は、はい……どうも。」

怪我をしたティアを介抱するのはさん。あたしは勇気を出して
話しかけてみた。

「あ、あの………なの…じゃなかった、高町教導官一等空尉！」

「ん…？どうしたの？」

近づいてくるのはさん。彼女が一步步歩きだすたびに、あた
しの胸の鼓動が高まるのを感じた。思い切って話しかけようとする
と、なのはさんが先に

「なのはさんでいいよ。四年ぶりだね…スバル。」

……覚えててくれた。そう思うと、涙が出てきて、言葉にならなくて…あたしは、なのはさんの胸の中で泣いていたんだ。

チェンジ3 集結！！新部隊誕生！

「……………あのさ。」

あれから休憩室で休んでいると、ティアが話しかけてきた。

「あたしたちが最後に戦ったゲッター3…あのパイロット…」

「やっぱり、ティアも思った…？」

さつき戦ったゲッター3。冷静に考えると、ほとんどまぐれのような勝ち方だった。どうも相手が魔法を使う事に慣れてなかったみたいだし、何よりも…

「あの投げ技…あんなものはスペックノートに無かったわ。ひよつとしなくても、凄いいパイロットと戦えたのね、あたしたち。」

「そう…だね。ひよつとして伝説のゲッターチームとか…！」

「はあ！？そんなわけないでしょ！」

そんな雑談をしていると、ティアが時計を見て

「スバル、そろそろ……………」

「ん？」

時計を見ると10分前だった。集合までまだ時間はあるけど、ティアはさっきまで怪我してたんだよね…そんなこんなであたしたちは、早めにミーティングルームに行くことにした。

【バンバン撃ってギュンギュン飛ばしたい君！！時空管理局に入ろう！！！！】

ティアとふたりで、管理局の勧誘ポスターを見ていた。いつ見ても凄いポスター…これをデザインしたのは八神二佐なんだって。

しばらく経って、あたしはティアと二人で、八神二佐とハラオウン執務官から新部隊の誘いを受けていた。ロストログアの探索と確保が主な任務になるっばいけど…………どうなんだろ？

「あ、待たせたね。遅れてごめんね。」

突然後ろから聞こえた、女の人の声。振り返ると、青い制服を着たなのはさんが、駆け足でやってきた。

「まずは試験の結果ね。二人とも技術は問題無し…だけど、危険行為や報告不良は、見過ごせるレベルを超えているね。」

やっぱり…ダメだったかな。ティアもうつむいている。

「自分とパートナーの安全や、規則を護れない魔導師が、人を護ることが…できる？」

なのはさんはつづけた。

「特にスバル。あなた…救助隊志望よね？救助隊ならまず、現場で確保すべき事は何だって教わった？」

「は…はい！迅速な行動と、被救助者の安全確保…」

「違うでしょ？貴方の安全確保が先でしょ！いい、被救助者は残念ながら助からないケースだってある。だけど、救助に向かった貴方が倒れてしまったら、目の前にいる人も、その奥で救助を待っている人も助からないかもしれないのよ。」

なのはさんの言ってる事はもつともだった。

「残念ながら、二人とも不合格ね。」

分かってはいたけど、あたしとティアはうつむくことしかできなか

った。だけど、あれをやらなければ、時間内にゴールはできなかった。どっちに転んでも、こうなってたかもしれない…と、その時だった。

「…二人の能力や技術的に考えると、次までの半年間Cランクのままというのはいささか危険ね…というのが、わたしと試験官の共通見解。ね？そう思うよね、リイン。」

「は、はい！そうなのですよ、なのはさん！」

リイン曹長は緊張してるみたい。一方のなのはさんは、あたし達に二つの封筒と一枚の紙を渡してくれた。

「特別講習の参加申込と、推薦状。これを持って、本局武装隊の三日間の特別講習を受ければ、四日目には再試験を受けられるようにしたよ。」

「え、えつと……………」

困惑気味なあたしとティア。なのはさんは、そんなあたしたちを見て笑って言った。

「一度厳しい環境に揉まれて、安全を一から学んで。そうすればBランクなんて楽勝だよ！」

そう言っただッポーズするのはさん。それからなのはさんは付け加えた。

「それとね…あなたたちのゲッター1とゲッター3の戦い。もうほとんど、あれで合格あげちゃいたいくらいなんだよね。」

「え…？どういうことですか…？」

質問したティアになのはさんは

「あはは、実はあなたたちの試験だけ、最終関門を変更してたの。本来なら自動攻撃用のオートスフィアなんだけど…今回だけゲッターを使ったの。それも…ゲッターチームの乗った、ね。」

「「え…う、嘘！？」」

思わず素になっちゃったティア。だって…ゲッターチームでしょ！？あの、ガジェット戦争を勝利に導いた！！コクピットを攻撃した時に気付かなかった…ん？コクピット…！？

「え…？ゲッターチームって確か魔法が使えないって聞いたような…あ、あの！パイロットの方は…！！」

「あ…にやはは、入院中。でも、大した怪我じゃないよ。心配しなくて大丈夫。」

（た、大した怪我じゃないんだ……………）

「それに、いいの。これは本人の希望だったし。誰かはあなたたちに教えられないけどね。」

それからしばらく話をして、なのはさんは会議があるからと言って立ち去った。

「「ありがとうございます…！！」」

ティアと一緒に、頭を下げる。すると八神二佐が、

「合格までは、試験に集中したいやろ？わたしへの返事は、試験が済んでからってことにしようか？」

「す、すみません！恐れ入ります！！」

思わず二人で立ち上がって、敬礼した。その様子を笑われた事が、ティアはちよつと不服そうだった。

帰り道。あたしはティアに言った。

「ねえねえ、ティア。この封筒の中身ってどんな感じなのかな？」

「ちよつと、スバル。開けない方が良いわよ？」

でも、そう言われると開けなくなっちゃうんだよね〜封もされてないし、あたしは封筒の中身の紙を取り出した。

「って、人の話を聞きなさいよ、スバル！！」

「そういつてるティアだって、興味津々そうに顔近づけてんじゃない。」

「う…うぐっ…」

二人で紙を見る。だけど

「え…？」

「な、何…コレ…」

あたしとティアは呆然としてしまった。そこには、手書きの汚い字で「コマネチ」と書いてあるだけだった。

「コマネチ…暗号か何かかな？どという意味なんだろう…」

「…どーせ碌でもない意味でしょ？何となくそんな気がする…」

「……………でさ、新部隊の話、ティアはどうする？」

中庭の芝生の上で横になる、あたしとティア。隣にいたティアにさっきのことを聞いてみる。

「あんたは行くんでしょ？もしかしたらなのはさんがいるかもだし、すごいラッキーでしょ？」

「んー、まあね……………」

「でも、遺失物管理部の機動課って言ったら、普通はエキスパートとか、特殊能力もち揃いの生え抜き部隊でしょ？そんなところにてさ、今のあたしが、ちゃんと働けるかどうか……………」

どうしたんだろ？いつもより弱気なティア…よし！

「……………何よ？」

「んふふ……………ここは一つ『そんなことないよ！ティアは出来るよ！』って、言っただけいんだろ？」

ドヤ顔でそう言うあたしに、むっとした表情になるティア。次の瞬間……

「なーによそれ！そんなことないわよ！！バカ言っただけじゃないわよ！」

「いだいだいだいだい！！痛いってティア！ギブギブギブ……」

思いつきつねられた！？しかもお尻！！くっそう、いくらティアだってお尻つねるなんて最低だ！かなりの馬鹿だ……！！

「くっそう……ティアのつねりを食らって倒れなかったのは、あたしが最初の様ね……スバルデラックスヴィクトリー、てりや……！！！！」

仮入部3日でやめた卓球と1週間と2日でやめた自転車競技部と2年ちよつと続けたババ抜き部と幽霊部員のまま3年が過ぎた物理部によって積み重ねられたあたしの超人的身体能力によって生み出された超必殺技……その威力は……

「あ、足つった……！！」

「何イ!？」

空中で硬直したあたしは、そのまま地面に叩きつけられた。

「……………ね、ティア。」

「うん？」

あたしは、ティアと魚肉ソーセージを食べながら話をした。ちなみにこれ、ザリガニ釣りをして余ったやつ。

「あたしは知ってるよ？ティア口では拗ねたこと言うけど、本音は違うつてこと。」

「……………そう。」

「要するにツンデレ。」

「はあ!？」

あたしは続ける。

「フェイト執務官にも、内心ライバル心メラメラでしょ?」

「ラ、ライバル心とか、そんな大それたものはないわよ、知って

るでしょ？あたしの夢は執務官だから、勉強できたらいいなーってだけで……」

「なのはさんともキャラかぶりの意味で……」

「あんたホントに死んだ方が良いわよ！！ただでさえ気にしてるのに……！」

「やーいやーい！なのはさんもどきー……！」

「くっそー！どいつもこいつもあたしをバカにして……！」

あたしはコホンと咳して言う。

「だったらやろうよ！あたしはとにかくいろんなことを吸収して、もつともつと強くなりたい！ティアは新しい部隊で色んな経験つんで、自分の夢を最短距離で追いかける！」

「ま、まあそうだけど……」

あたしは付け加える。

「当面はまだまだ二人で一人前扱いなんだからさ！まとめて引き取ってくれるの嬉しいじゃん！」

……ん？なんかティア怒ってるような……？

「そーいうこというなっ！何が悲しくて、どこにいてもあんとコンビ扱いなの……？」

「もずくー！ー！！」

辺りはもう、夕暮れになっていた。芝生に横になりながら、あたしはティアに誓ったんだ。

「ティア。あたし…自転車乗れるようにがんばるよ。」

「…がんばればいいんじゃない？あと、スバル。今更だけど…あんな脳みそ濃んでるわよ、このバカ！！」

「そんなア！ティアは一日に何回バカって言えば気が済むの！？」

「まだ一回しか言ってないでしょうが、この便所虫！」

「ガン！あたしゴキブリよりもカマドウマの方がキモイと思ってるのに！！くっそう、どいつもこいつもあたしのせいにして！みんなティアが悪いんだ！！あ、こうなのってそもそもティアが…」

あたしたちは深夜までお互いの嫌な事を相手になすりつけ合ってしまった。しまいにはお互い愚痴の言いあいになって微妙に仲が良くなりまして。

S i d e o u t

「武蔵さん、大丈夫ですか？」

なのはとフェイトは、救護室に寝ている武蔵を訪ねた。なのははケーキを、フェイトは花を持っていた。寝ていた武蔵は起き上がる。

「おう、なのはちゃんにフェイトちゃんじゃねえか。おいおい、いいんだぜ、そんな…」

起き上がりざまに一瞬顔をしかめる武蔵。フェイトは駆け寄って言う。

「だ、大丈夫ですか!？」

「なあに、避けられなかった俺が未熟者なのさ。へへ、それにしても少しは骨のある奴がいるじゃねえか…」

うれしそうにそう言う武蔵。彼になのはは真剣な表情で言った。

「武蔵さん、例のアレですが…」

「…………俺には良く分からねえが、どうやらそうらしい。ま、今となっっちゃあいつが何を考えていたかは分からねえけどな…」

なのはは言う。

「もっと…竜馬さんに、ゲッターの操縦を教えてもらいたかったです。」

「そう…だな。あいつが生きていたら…何て言っただろうな。」

『どうやら全員集まっているようね？』

武蔵がそう言った時、通信が開いた。それを見るや否や、武蔵は即座に敬礼する。一瞬遅れたなのはとフェイトも敬礼する。

『まずは、試験官お疲れ様、と言っておこうかしら？怪我の具合はいかかでしょう？』

「恐縮です、ミゼット提督。あと数日もすれば訓練に参加できるようになるでしょう。」

ミゼットは、武蔵に労いの言葉をかける。

「それで…提督。ご用件は？労いとお見舞いだけでは流石にないでしょう。」

『ええ、そうよ。』

ミゼットはほっほっほと笑ってから言う。

『巴武蔵陸曹長、あなたには異動してもらうわ。行先は、八神はやて二等陸佐が指揮する、古代遺物管理部【機動六課】ですよ。そこにいる高町なのは一等空尉とフェイト・Ｔ・ハラOWN執務官と同じ…ね。』

武蔵はにやりと笑った。

「ほう…？ヴァイスと一緒に運転係か。それにリインフォースは

シャマルの助手だろ？うまく引き入れたもんだぜ、お前さんもはやてちゃんも。」

ミゼットは笑いながらさっさと言う。

『ほっほっほっ…階級は陸曹長なのに給料その他権限は二等陸佐レベルまで引き上げてるんですもの…拒否権はないわよ？八神はやてを押さえて筆記試験満点合格の隠れエリートさん？』

「まったく…俺の階級は上げたくないわけだな。分かるぜ…なにせ俺は魔力資質ゼロだからな。」

武蔵は体の包帯を触りながら言う。

「しっかしよ、ばあさん。戦争でもやるつもりか？」

武蔵はそう言うが、ミゼット提督は表情一つ変えない。

『今、貴方に言っても分からないわ…いずれ話す事になるかもしれないけれど。その日が来ない事を私は祈っていますかね。』

「俺もごめんこうむりたいぜ。」

笑いあうミゼットと武蔵。

「……………あえて聞く。何故ゲッターをあんなにもよこすんですか5機…スクラップになったのを合わせれば6機ですよ。いくらなんでも異常な戦力じゃないですか？」

『貴方達には、ゲッターロボのテストパイロットを依頼している

わ。ゲッターロボGの基本OSを制作するには、膨大なデータがいるのよ。』

「提督。お言葉ながら…ゲッターには深く関わらない方がいいですぜ。貴方のためにも…ミッドチルダのためにも。」

しばらくにらみ合いを続ける、武蔵とミゼット。だが、武蔵はため息をついて寝転がった。

「結論から先に言います。了解しました、ミゼット提督。あとさっきのは忘れてください。」

『それでいいのよ。』

ミゼットが笑うと通信画面が消えた。武蔵はベッドの上でつぶやいた。

「ゲッターGか…おれは初代ゲッターだけで十分だと思うんだけどな。」

その夜 廃棄都市

「ゲッターアアッビイイイイムッ!!」

空から降る火の球。それは地面にぶつかると碎けて燃え広がる。
一機の無傷のゲッター1が、そこに立っていた。

「出現の頻度、数、増えてきてんな？」

「うん。それに、動きも段々賢くなってるね」

コクピットが開くと、管理局の制服を纏った男女三人が出てくる。

「だが、この程度ならまだ私達でも抑えられるな。」

「ああ。」

「しょーじき、ド新人に任せるにはめんどい相手だけだなあ……」

「しょうがないだろう。いずれ私達だけじゃ、手が足らなくなる。」

「

三人の視線の先には、静かに燃えるガジェットの残骸があった。

チェンジ4 激闘！！はじめての模擬戦！

新暦0075年4月

遺失物対策本部 機動六課隊舎

「うふふー このお部屋も、やっと隊長室らしくなりましたねえ」

部隊長室で、専用の机とイスに座ったリインが、嬉しそうに回転する。リインのサイズに合わせているため、どれもミニチュアだ。

「そやね、リインのデスクも、ちょうどええのが見つかってよかったなあ。」

「はい！リインにぴったリサイズですー！」

それにはやては微笑んで返し、リインも楽しそうにはしゃいでいた。その時、来客用のインターフォンが鳴った。はやては入ってくるよう返事をする、よくウルトラ警備隊とかの自動ドアが開く音とともに、二人の人物が入ってきた。

「おっ！お着替え終了やな！」

「お二人とも素敵です！」

はやて達の言葉に、ニコニコするフェイトとなのは。しかし次の瞬間、その顔が青ざめた。

「うえっぷ！？」

口と鼻を押さえたのはフェイトだった。

「うわっ、魚くさっ！？何この部屋！！」

入って早々、部屋が臭すぎると不満を漏らす二人。だがはやてはへらへらしながら

「ほらほら、入って入ってー！ちょっと変なおいするけど入って入ってー」

「ちょっとどころじゃないんだけど…はやて。鼻つまんだままでいい？」

鼻をつまんだまま部屋に入る二人。そのまま来客用のソファに腰掛けようとするが

「うわっ！？ちよっ、はやてちゃん！？なにこれ！！」

肝心のソファはボロボロで、中から綿やら黒光りする虫やらが飛び出していた。

「うん、家具買っお金無くてな…その辺の粗大ゴミを…」

「ちょっと…はやて、窓開けて。」

フェイトははやてに窓を開けさせると、おもむろに片腕でソファーを持ち上げると

「おりゃあああああ！！」

外にブン投げた。

真下

そこでは、エリオとキャロがアップをしていた。

「ねえ、キャロ。」

「ん？どうしたの、エリオ君？」

エリオは真剣な表情でキャロに言った。

「この前知ったんだけどさ…なのはさんって僕の名前、『エリ夫』
ってずっと思ってたんだって。」

「はやては『エロ夫』だと思っていたらしい。シグナムに至っては
『いたっけ…？そんなの。』な扱いである。合掌。」

「ええ！？う、うそ！？」

エリオはキラキラした涙を流して言った。

「だからさ、僕、この訓練が終わったら」

そう言いきる前に、エリオの体にはボロボロのソファァーが突き刺
さっていた。

「エリオくーーーーーん?!」

下の事など、これっぽちも気にかけていない二人は、涼しい顔で敬礼した。

「本日ただいまより、高町なのは一等空尉、」

「フェイト・Ｔ・ハラOWN執務官、」

「「兩名とも、機動六課へ出向となります！どうぞ、よろしくお願います！！」」

背筋を伸ばし、敬礼をした後、三人は笑いあった。どうやら臭いの元はソファーだったようだ。部屋が臭くなくなっただけで、フェイトの機嫌はうなぎのぼりだった。と、その時、部屋に青年が入ってきた。

「あれ…臭くない…あ、申し遅れました。グリフィス・ロウラン准陸尉であります！」

「グリフィス、すごい成長したね。前はこんなに小さかったのに…」

「その節はどうも…」

グリフィスは一礼し、はやて達と話し始めた。

「テストロッサ。」

はやての挨拶の後、フェイトと廊下を歩いていたシグナムが立ち

止まって言った。

「何ですか？シグナム？」

「…………地下から、アレらしきものが見つかったらしい。」

それを聞いた時、フェイトは思わず身構えた。

「…本当なのですか。」

「間違いない。この近辺のゲッター指数が若干上昇したのも頷ける。」

フェイトの額に脂汗が浮かぶ。信じられない事だった。そう、それは物語の中だけの話であると、誰でも思っている事だった。

シグナムは、あたりに人がいないことを確認して、小さな声で話す。

「これを知っているのは…私とクロノ、そしてスクライアだけだ。たまたまその場に居合わせたのだから…」

「じゃあ、ゲッターGの起動実験の失敗も…」

シグナムは無言で頷く。彼女も、何かの間違いであってほしいとフェイトに告げた。こればかりは、自分たちで何とかできる問題ではなかった。伝承の通りであれば…

「まさに…神のみぞ知る、と言ったところですね。シグナム。」

「神なぞ一度も拝んだ事の無い私だが…この状況を打破してくれ

るのであれば、いくらでも拝み倒してやろう。」

早速訓練を始めるために、フォアード四人はなのについていている。四人ともなのはを前にして緊張しているようだ。すると、そのなのは突然こちらを振り向いた。

「確認していなかったけど、四人とも自己紹介は？」

「名前と、経験やスキルの確認はしました。」

ティアナがそう答える。すると

「あと、部隊分けと、コールサインもです！」

ティアナに続けるように、エリオ・モンディアルが返事をし、隣にいたキャロ・ル・ルシエも頷く。

「そう、分かったわ。」

なのはは答えると、再び移動を開始した。

チェンジ4 激闘！！はじめての模擬戦！

訓練施設前

白と青を基調にした、涼しげな印象の制服を着て、なのはは海を見つめていた。

「海……か……」

十年前のホワイト・クリスマス。仲間を守るために、自らの命を犠牲にして海に散っていった男。

「竜馬さん……私ね、戦技教導官……教官をやっているんだ。」

きつとあの人なら、鬼教官だなんだ言ってきたに違いない。そう思うと目頭が少し熱くなった。

「なのはさん!」

そこへ後ろから声がかかった。なのはは目を軽くぬぐって振り向くと、スーツケースを持ったメガネの女性が、こちらに駆け寄ってきていた。

「シャーリー!久しぶりだね。」

「はい!お久しぶりです!」

シャーリーと呼ばれた女性は、ニコニコしながら一礼した。ふとなのはが視線を横にずらすと、こちらに向かって走ってくるフォアードが見えた。なのはは小さく頷いてから、四人を訓練スペースへ案内する。それから、四人にデバイスを手渡してから言う。

「今返したデバイスには、データ記録用のチップが入っているの。丁寧に扱ってね。それと……」

なのははシャーリーに視線を向けて、彼女を紹介した。

「メカニックのシャーリーから、一言」

「えー、メカニックデザイナー兼、機動六課通信主任の、シャリオ・フィニーノ一等陸士です。みんなはシャーリーって呼ぶので、そう呼んでね！」

シャーリーは微笑んでから、説明を始めた。

「みんなのデバイスを改良したり、調整したりもするので、時々訓練を見せてもらったりします。デバイスについての相談とかあったら、遠慮なく言ってね！」

「それでは、早速訓練に入るよ。」

説明が終わり、なのはは彼女にシステムを動かすよう指示する。

シャーリーは元気良く返事をする、ウィンドウを開いてパネルを操作した。

「機動六課自慢の訓練スペース！教導隊完全慣習の、陸戦用空間シミュレーター！コードAwakishinekでログイン！」

嬉しそうに、ウィンドウのコードを入力すると、海上に浮かぶ何も無い防波堤から、ビルが出現した。

「わぁー！」

「すごい……」

何もない海上に突然都市が現れたのを見て、フォアード達は感嘆の声を漏らす。

「はいはい、みんな来て！」

そんなフォアード達になのはが声を掛け、先行してスペースに入っていく。それを見て、彼らも慌ててついていった。

同時刻

八神はやては、真剣な表情で廊下を歩いていた。するとそこに、金髪の白衣の男が現れた。彼ははやてのよく知る人物だった。

「ユーノ君、ひさしぶりや。」

「やあ、はやて。直接会うのは…一年ぶりくらいだったかな？」

彼こそが、成長したユーノスクライアだった。義手は外しており、片方の袖がだらりと下に下がっている。義足も戦う事は無いので、出来るかぎり体の負担をかけないものに変更されていた。ズボンの裾から、金属のスプリングがのぞく。ユーノは杖をつきながら、はやてと並んで歩いていった。

「せやな。けど…こんな形では会いとうなかったな。」

関係者以外立ち入り禁止の入り口をくぐり、警備員に敬礼する。ほとんど顔パスでエレベーターに乗ると、地下のフロアまで降りていった。

「まさか…これが【オリジナル】の…？」

はやての問いに、ユーノは首を横に振った。

「いや、違う。これは完全に機能を停止している…あ、着いたよ。」

扉が開き、二人はソレの前に立った。地下の岩盤から発掘されているソレは、時空管理局のゲッターロボよりも、一回りほど大きい巨人だった。装甲は劣化し、もはや岩と外見の区別がつかない。しかし、そのシルエットは、はやてにとつて見覚えがあった。それは

「どう見ても…ゲッタードラゴンやな……」

時空管理局が、ゲッターロボの跡継ぎ機として開発を開始したゲッターロボG…その空戦形態でゲッター1に相当する機体、ゲッタードラゴン。それと巨人は酷似していたのだ。

「そう、これはゲッタードラゴン。金属反応は検出されたし、微量ながらゲッター線反応もあった。」

ユーノの言葉に、はやては耳を疑った。

「え…！？だ、だってゲッターGは、まだ起動実験までこぎつけてあらへんよ。せやけど、こいつは聖王オリヴィエの時代の地層やないか。その時代に動くゲッターがあつたとしても言うんかいな。」

はやての問いに、ユーノは眼鏡を直して言う。

「僕だって信じられないよ。でも…これは事実なんだ。現にこいつが発掘されたのは、岩盤の中で突然再起動して動き始めたからだったんだ。それに…」

今度は、二つの物体をユーノははやてに見せた。

「嘘…やる？」

今度ばかりは、はやてすらも空いた口が塞がらなかった。ユーノは言う。

「そう、ゲッターライガーと、ゲッターポセイドンだ。この三体が急に暴れ出し、リインフォースのゲッター2で撃破してもらったが…信じられないだろうけど、生きてるよ。こいつは。」

ゲッター炉心にエネルギーさえ入れれば、動くかもしれないとユーノは言う。はやては、ぼそつと呟いた。

「ゲッターとは…ゲッターとは何や…？」

その問いに、ユーノは微笑んで言った。

「ゲッター…それは、命と死。対局する宇宙のそのものだよ。」

S i d e スバル

『…よし、みんな聞こえる?』

「はい!」

なのはさんの念話が聞こえる。いよいよ訓練本番…私は頬を叩いて気合を入れた。

『じゃあ、早速ターゲットを出していくね。まずは八体から。』

通信の向こうで、なのはさんとシャリーさんの会話が聞こえた後、金属の装甲に覆われた、楕円形のロボットの様なものが現れた。

『私達の仕事は、搜索指定ロストログアの保守・管理。そして、特殊な事態が発生した時の戦闘。』

見たところ武器は無く、胴体部分の中央にはレンズが付いている。パツと見、父さんが見せてくれた地球のアニメのガンムに出てきたボールみたい。攻撃方法は、体当たりか…レーザー?ミサイルが収納できそうなスペースは無いし…

『自立行動型の魔導機械、これは近づくと攻撃してくるタイプだよ。』

ホログラムだと分かっているけど、見た感じも質感も、資料映像で見た本物と全く同じ。ティアを見ると、自然とデバイスを握る手に力が入っていた。私もリボルバーナックルを握りしめる。

『攻撃は結構鋭いよ。それでは、第一回模擬戦訓練の説明をするね。勝利条件は、逃走する目標を全て破壊、あるいは捕獲。失敗条件は誰かが撃墜されるかタイムアップ。一機でも残っていたら失敗だから気を付けて。制限時間は、合図があつてからの15分。いい？』

「……はい!!」

『それでは……』

と、なのはさんが一旦区切つて、号令をかけた。

『ミッション・スタート!!』

時空管理局本局

「レリック？」

クロノ・ハラオウンは、盟友のユーノと話をしていた。完全に遮

断された防音室での会話。これは機密レベルの事だった。

「古代文明の時代、何らかの目的で作られた超高エネルギー結晶体……か。」

「見た目こそただの宝石だけど、暴走したときの最大エネルギー量は、ウランの38倍。この建物だって、地面ごと跡形も無く蒸発するだろうね。」

どこか面白そうに、ユーノはペン回しをしながら言う。

「過去に四度発見されて、その内三度は周辺を巻き込む大災害を起こしてる……。まあ、死傷者が今まで400人以下だから、奇跡と言えば奇跡だよな。」

クロノは悩みながら言う。

「なるほど……本来武器として使用する事を目的として造られたのではない……となると……」

「これほどまでの動力を複数必要とする【巨大な何か】を動かすためだとしたら……?」

ユーノは頭をぼりぼり掻きながら言った。

「んで、その内二件では、製造プラントらしき施設が発見されると……この二件は甚大な被害が出たものの、死傷者はゼロ……と。」

「そう考えると、主犯は技術者か、それに明るい人間……あ、お前とか?」

一升瓶の日本酒を飲んでいたユーノは苦笑した。

「おいおい、確かに爆発は芸術だと思うけど…僕が人に迷惑をかける事なんてするかい？」

「年中してんだろうが。宿舍一つ吹っ飛ばした事もあったよな…」

「あはは、あれは新型爆薬の実験で…」

ユーノは、日本酒を飲んで言った。

「それにしても…災害が起きた後、まるで痕跡を消すようにして施設が破壊されている。こちらは全く証拠がつかめず、なおかつ目撃者がいない…となると…」

「広域次元犯罪の可能性が高いな。それと、局の内部や情報伝達システムにかなり明るいを見た。」

「おうおう、やっぱりクロノは賢いな。さらに、そのレリックを収集しようと動き回ってるのが…」

ユーノが、新しいウィンドウを開く。

「ガジェット・ドローン…か。」

「特定のロストログアの反応を搜索し、それを回収しようとする、自立行動型の自動機械。まあ、ゲッターの敵じゃないけどね。」

「だが、こいつはゲッターと違って小回りが利く。下水道などに

逃げ込まれた時は厄介だな。白兵戦で落とさなければなくなる。そこに来てA M F…ヒヨッコどもには、少々荷が重い気がするが？」

コーヒーの飲みながら言うクロノに、ユーノは酒瓶を振り回して言った。

「はは、だからさ。よく考えたよ、はやての奴も。」

「ああ…だが、我々には時間が無い。そう…勝利するためならば、俺は手段を選ばん。」

部屋に照明が灯る。ガラス張りのクロノのバックには、巨大なゲッター1の顔が映っていた。

S i d e スバル

「うおおおおおおっ！！」

手始めに、ターゲットのガジェットに向けて、ナックルから速射砲を放って様子を見る。でも、A Iのくせに軽々かわすと、一気に加速して逃走を続ける。

「何これ、速っ！？」

このスピードだと、今のあたしじゃ追いつけない。と、ガジェット
の進行方向に、エリオがいた。

「でりゃあああつ！！」

エリオはレーザーを避けてから飛び上がると、ストラダを振って
斬撃を飛ばす。決まった！と思ったけど…ガジェットはそれすら
避けて、逃げていった。空中を浮遊しているから、どの方向に逃げ
るか分からないし…

『前衛二人、分散しすぎ！ちよつとは後ろのこと考えて！！』

『あ、はい！』

『ごめん！ティア！！』

しまった！攻撃に集中しすぎて、ティア達のことを頭になかった
…前衛は攻撃するだけでなく、後衛を守る仕事もあるのに、忘れて
たな…

エリオと一緒に追跡していると、ティアの魔力弾がガジェットに放
たれた。私の顔の横をすり抜け、強化された弾丸は、吸い込まれる
ようにガジェットに飛んでいく。あれ…？何で避けないんだろ？そ
う思ってたら、ティアの弾丸が着弾する直前に消えちゃった？！

「ッ！バリア！？」

「違う、フィールド系！！」

キャラロが言う。この手のエキスパートが言うんだから、多分あつ

てるんだと思う。でも…何で!?

『そう、ガジェット・ドローンには少し厄介な性質があつてね。攻撃魔力をかき消す【アンチマギリンクフィールド】、AMF…このフィールドに入った、魔力で生成されたエネルギー体は消滅するの。』

なのはさんが説明を入れてくれるけど、聞いてられる状況じゃない!そうしているうちにもガジェットは逃げていき、タイムリミットは刻一刻と迫っている。時計を見たら、あと8分しかなかった。ウイングロードを展開して、全速で追いかける!

『バカ!危ない!!』

『それに、AMFを全開にされると……』

ガジェットとの距離が5メートルほどに差し掛かった時、急にウイングロードが消え始めた。

「や、やばっ!?!」

宙に投げ出されてビルに叩きつけられたけど、何とか着地する。

『飛翔や足場作り、移動系魔法の発動も困難になる。』

痛たた…説明最後まで聞けばよかった。するとなのはさんからフオローが入る。

『スバル、大丈夫?』

「は、はい！なんとか…」

『まあ、訓練中では、みんなのデバイスにちょっと工夫をして、擬似的に再現してるだけなんだけどね。でも、現物からデータを取ってるし、かなり本物に近いよ。油断しないで。』

周りの事を考えずに、自分だけ焦って…気合入れなきゃ！

『対抗する方法はいくつかあるよ。自分で考えて、実践してみて。』

対抗する方法…そういえば、天候操作魔法で作り上げた雷とか、魔力で撃ち出した小石とか、魔力で発生した効果までは消せないはず。だったら……

『スバル！いくつか試したい方法があるの。』

ティアからの念話に答える。

『あたしもある。エリオ！あいつら逃がさないように先行して、足止めできる？』

『は、はい！やってみます！！』

エリオは頷くと、ストラダーで加速して飛んでいった。

「みんな、よく走りますね。」

「そうだよ。【夕陽にほえろ！】だって、新人局員は…」

モニターの前で、シャーリーとなのはは談笑していた。

「ふ、古いの知ってますね…なのはさん。あれって確か、イシハラさんやマツダさんが生きてた頃だから…えっと、三十年くらい前…でしたっけ？」

「うんうん、地球にも似たタイトルのドラマがあってね…出演者の名前や顔までそっくりなの！でも、ジープンの最期は地球の方が良いよ。今度貸してあげよっか？」

傍観者とは、大体こんな感じである。

前衛のあたりは、エリオと一緒にガジェットを追い詰める。エリオはストラードのカートリッジをロード。頭上で回転させて、その勢いで足場を斬りつける。全体重を乗せた斬撃は、真下のコンクリートを破壊する。土煙と衝撃波に乗って、その破片がガジェット二機を貫いた。もう二機は攻撃を躲し、逃げていく。でも

「逃がさないよ!!」

まずはカートリッジを消費して、いつも通りガジェットに殴りかかる。案の定、AMFが発動して威力が出ない。だけど!

「ふっ!」

後ろにいたガジェットを足で挟み込んで、地面に叩きつける。そしてナックルを打ち付けて、ギアを回転させる!!

「うりゃあああああっ!!」

狙うのは、一番装甲の薄いレンズ部分! AMFを発動したつてもう遅い。ビームが収束していくけど、それより早くあたしの拳がガジェットをぶち抜いた。

すると、目の前を飛んでいたガジェットが、炎に包まれて爆発した。多分キャロがつれてたフリード!? だと思っ。すると、隣を飛んでいたもう一機の動きが鈍くなった。

「我が求めるは、戒めるもの、捕らえるもの。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖……!!」

キャロの詠唱が聞こえてくる。これは…召喚魔法?

「鍊鉄召喚! アルケミックチェーン!!」

魔方陣が展開されて、光の鎖がガジェットに絡みつく。破壊よりも難しい捕獲をするなんて…ティアと同じく、器用な子だなあ。

『スバル！上から落とすから、そのまま追つて！』

「りょーかい！！」

ティアからの指示だ！目標は、生き残っている3機。時間はあと2分しかない…弾を精製するティアを通り過ぎる時、一瞬魔力を薄い膜でコーティングしているところが見えた。フィールド防御を突き抜ける、多重弾核射撃の遠距離系。AAのスキルを使うなんて…ただ殴ってるだけのあたしとは違うね。

「ヴァリアブルツシュート！！」

三発のオレンジの弾丸が、あたしを追い越していく。三角形の陣形をとって進むガジェットは、お互い離れて回避しようとする。でも、ティアは敵が避けることを見越して、先に三角形の頂点を狙って弾丸を放った！避けようとすれば他のガジェットと激突するし、かといって離れれば、ティアの弾丸に貫かれる！！自動で攻撃を避けるようインプットされたガジェットは、空中で衝突して爆発した！！

「ティア！ナイス！！あの攻撃をおとりに使うなんて…」

『フン！うるさいわね…このくらい、とーぜんよ！』

相変わらず檄を飛ばすティア。でも、なんで訓練が終わらないんだろ？あたしが黒煙を凝視していると

「し、しまった！？まだ一機いる！！」

嘘！？全部自滅したと思ったのに、大破したガジェットがよろよ

ると黒煙から現れた。時間は…あと十秒！？ティアはいまさら撃てないし、キャロは罫系だから無理。エリオやあたしのスピードでは、もう追いつけない。

（考えるんだ…考えるんだ、あたし…）

考える前に、全速でガジェットに向かって突っ走る。ほとんどは言っていない脳みそをフル回転させ、あたしは攻略法を探す。あたしの魔力砲は威力が無くて…ん？魔力砲…飛ばす？
その時、あたしは閃いた。

「そうだ！これなら…！」

9
カートリッジをありったけロードする。

8
右手のリボルバーナックルのター빈を、最大速度で回す。

7
それを確認すると、あたしはナックルを腕から引き抜いた！

6
ナックルを右手で持ち、大きく振りかぶる。

5

バチバチと火花を上げ、徐々に減速していくガジェット。いける
！！

4

全ての魔力エネルギーを解放して、ナツクルの後ろからジェット
噴射を作りだす！！

3

慣性の法則を利用するために、急ブレーキをかけながら投てき姿
勢に入る。そして

2

「いっけええええええええ！！」

あたしは全力でリボルバーナツクルを投げつけた！！

1

そして

その先の記憶は、あたしにはなかった。

チェンジ5 出動！！ファーストアラート！ 前編

格納庫でゲットマシンの点検をしていた武蔵は、偶然にもシグナムと出会った。彼女も彼女で整備から何か聞いているようだったが、話が終わって武蔵に気づくと、こちらに手を振った。

「武蔵、久しぶりだな。」

「そっちこそ、シグナム姐さん。ゲットマシンを見に来たのか？」

武蔵の問いかけに、シグナムは「ああ」と受け答えをする。見上げる先には、真紅のマシン：イーグル号の姿があった。

「マイナーチェンジを繰り返しているからな、ゲッターは。マシンの確認は必要不可欠だ。」

シグナムの言葉の訳は、ゲッターロボの開発体制にあった。今、ここにある「ゲッターロボ」は開発途上のものであり、完成品ではない。建造された年月日が大きく異なるものは、ゲッターの外見そのものすら若干異なっているものも多いのだ。極端な例ではゲッター2で、時期によればドリルの位置が逆だったり、理解しがたいマイナーチェンジを遂げているものも多々ある。

しかしながら、ベース自体はそれほど変化していないので、合体のモーションといった最も重要な動作は共通する様に造られている。不慮の事故を減らすためだ。しかしながら、細部のパーツを変えつつ、改良を加えていくコンセプトはそのまま開発当初から受け継がれているのだ。

「俺は第二世代型が肌に合うな。第一世代は、そもそもゲッター

アームがほとんど伸びなかったしな。」

「第二世代：ナカジマ達の壊した練習機の型か。」

武蔵は頷く。生前に乗っていたゲッターに、最も近いというのが理由だった。ゲッター3はクセのある機体のため、それは如実であった。

「そういえば、おとといにも、もう一機完成したらしいな。もうそろそろで搬入されると思うんだが…」

武蔵がそう呟くと同時に、格納庫がライトで照らされる。

「お、来たか。」

格納庫に入ってくる、三台のトレーラー。その先頭には、手を振るヴァイスの姿があった。

チェンジ5 出動！！ファーストアラート！ 前編

「…それじゃあ、今日の早朝訓練はこれでおしまい。みんな、頑張ったね。」

バリアジャケットに身を包んだのはが、笑顔で訓練の終了を告げながら着陸する。それと同時に、まるで糸の切れた操り人形のように倒れ込む、新人四人たち。その顔は安堵の表情を見せながらも、死にかけていた。

あれから二週間が過ぎた。はじめての模擬戦は合格の形で幕を下

ろしたが、リボルバーナックルを投げつけるといふ荒技をやり、あまつさえ転んで頭を打ったスバルは、後できつちりとなのはからお仕置きを食らった。気を失ったのも数分で、幸いにもそこまで大怪我にならなかつたからいいが……とはなのは談。皆に心配をかけてしまった事を謝罪しつつ、翌日からすぐに訓練に参加したスバルに、なのはは目を細めた。

あれ以降、なのは達は早朝にトレーニング中心の訓練を行っており、最後になのはと新人で模擬戦も行っていた。模擬戦といっても新人側の勝利条件は一撃を入れさえすれば良いもので、圧倒的なハンディキャップが付けられていた。結果だけなら新人側の勝利で終わったが、四人全員でかかって、このハンデでギリギリ互角というもの。結果的に毎回血を見るのは新人側である。「血祭りにあげてやるなの」と笑顔で言うなのはさん。最近その笑顔にドキッとしてしまったティアナは、もうそこまで精神が汚染されているのかと、たまらなく悔しくなった。後で聞いたら、新人全員が同じ感想を持っていた事を知り、人知れず悲しくなったティアナであった。

「キョクッ？」

「どうしたの？フリード……あれ？なんか焦げ臭くありませんか？」

ひっくり返ってるメンバーの中、キャロが鼻をひくつかせながら言った。

「そういえば確かに……」

「ス、スバル！あんたのローラー！！」

「ええっ！？」

ティアナに指摘され、足元を見るなり跳び上がるスバル。お手製のローラーシューズが火花を散らし、煙を噴き上げていたのだ。スバルは急いでデバイスを取り外すと、けんけんしながらティアナに倒れ込んだ。ここ最近の訓練で、ついに限界を迎えたようだ。

「あちゃー…こりやマズイね…今日一日じゃ直らないかも…」

頭をかくスバル。すると、のしかかられていたティアナが不満を漏らした。

「ちょっと、スバル！どきなさいよ！！」

「えー？いいじゃん、ティア。」

そう言っ、犬みたいに頼りしてくるスバル。きっと見えない耳としっぽがあるんだろうと、キャロは思った。と、スバルは思い出したように

「あ！そういえば、ティアの銃も弾を詰まらせていたよね。大丈夫？」

「大丈夫……って言いたいけど、正直辛いわね。毎日調整して、騙し騙しって感じね」

スバルを引っぺがしながら、ティアナも自分のデバイスを見る。ティアナのアンカーガンは、今回の戦闘中に一度、弾詰まりを起こしていた。模擬戦、それもあの場面だったから良かったものの、これが命の駆け引きのある現場だったら…笑い事では済まなかった。完成品のデバイスを持っているエリオとキャロは機能不全云々は無

かったが、将来的には…と不安になっていたその時だった。

「うーん……みんな実力もついてきたし、そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかな？」

「……新デバイス…!!」

なのはの言葉に、新人四人は驚きの声を上げる。それを見て微笑むのは。以前から話だけは聞いていたが、もう完成しているなんて、誰も思っていなかったのだ。

「そうだよ。正確にはデバイスを交換するのはスバル、ティアナの二人で、エリオやキャロの二人は、それぞれ手を加えるだけなんだけどね。」

「つまり自作組は全交換、って訳か…」

「確かに限界は感じてきたし、いい機会なのかもね。」

少し名残惜しそうに、自分の自作デバイスを見るスバルとティア。お疲れさんと小さく呟く二人。と、なのはは言った。

「それじゃあ私が連絡しておくから、後でシャーリーのところにみんなで行こうか。とりあえずシャワーを浴びて、それからね。」

「……はい!!」

四人は、元気よく答えた。

シャワーを終えて集合すると、新人四人はメンテナンスルームに来ていた。

「うわぁ……これが……」

「私達の新デバイス……ですか？」

少し遅れるとなのはから聞いた四人は、一足先にシャーリーの元へ訪れていた。出迎えてくれたシャーリーに導かれるように進むと、その先にデバイスは置いてあった。

「そうでーす！制作主任は私、協力なのはさん、フェイトさん、ダークさん。更にレイジングハートさん、バルディッシュさんにリイン曹長。オマケに、外部協力者として様々な方にも協力していただきました！」

シャーリーの言葉に、驚きを隠せない四人。彼女は続ける。

「なのはさんに聞いていると思うけど、今回新デバイスを渡すのはスバル、ティアナの二人ね。デバイスの名前は順番に【マツハキヤリバー】、【クロスミラージュ】って言います。それぞれ皆さんの自作デバイスのデータから作ったものです。」

につこり笑うシャーリーに、エリオは聞いた。

「あの、僕達のデバイスはどいうったところが変わるんでしょう

か？見た目は変わっていないように見えるのですけど……」

「そうみたいだね……」

デバイスを見る二人に、上から声が掛った。

「それについては私が説明するですよ」

「リイン曹長？」

待つてましたと言わんばかりに、何処からか現れるリイン。ふわふわと飛んで、デバイスの上で停止する。

「エリオとキャロのは、今までデバイスに慣れてもらう為に最低限しか搭載していなかった機能を追加してるです。見た目は変わってなくても、中身は今までとは大違いです！」

「い、今までので最低限だったんですか！？」

「そうだったんだあ……」

デバイスの性能に驚く二人。と、その時だった。

「それとね…これを渡す前に、皆に大切な話があるの。」

部屋に入ってきたのは、なのはだった。

「なのはさん…？話というのは…」

ティアナの質問に、なのはは答えた。

「このデバイスの…『設計をした人』の話。」

「設計…？え、これを設計したのって…」

「ううん、私じゃないんだ。正直、私たちはただ設計図通りに組み立てただけ。」

そう言つて、首を振るシャーリー。すると、なのははファイルに入った紙を四人に手渡した。

「これは…設計図ですか？」

一番上は、マツハキヤリバーの設計図になっていた。紙の質からして、意外と随分前に書かれていた物だということだけは分かった。ただ、横に書いてある文字はミッドチルダのものではなかった。

「何て書いてあるんでしょうか…？」

「待つて、私に見せて！」

そう言つて顔を近づけたのはスバルだった。

「これ…地球の文字ですよ！私の父さんの故郷の！」

それを聞いて、驚く三人。スバルはそこに書いてある名を読み上げた。

「えつと…2005年12月23日これを記す…流…竜馬…？」

「そう…流竜馬。それが、この四枚の設計図を描いた人の名前。これはね、今から十年も前に書かれた設計図なの。」

その言葉に、全員が驚きを隠せなかった。

「ええっ！？じゅ、十年前なんですか！！」

特に、自作組のスバルとティアナは、思わず声を上げてしまった。

「あ、あの、そんなにすごいんですか？」

「そうよ、キャロ。デバイスは一年変わるだけで随分性能も変わってしまうの。それなのに、魔法文明の全く発達してない地球でなんて…なのはさんや八神二佐は本当に特別なのよ？」

確かに、普通の電化製品でも十年たてば性能を大きく後れを取ってしまう。それなのに、シャーリーやなのはに手の入る場所が無いと言わせるほどの技術力は半端ではなかった。

「初代ゲッターチームのリーダー、流竜馬…彼自身も、凄腕の魔導師だったの。ゲッターロボは、彼のバリアジャケット時の姿をモデルにしているの。接近戦なら、私とフェイトちゃん二人でかかって勝てないほどの強さなの。何度も私たちの命を助けてくれた、師匠みたいな人…」

そして、なのはは言った。

「でもね、この設計図を描き終わった翌日…ある戦いで命を落としてしまったの。私たちを、助けるために…」

「そんな…!!」

兄を失ったティアナは、余計にその気持ちが分かった。なのはは続ける。

「弱かった私は、何もできなかった。ただ、竜馬さんが死んでいくところを見ているだけしかできなかった。だからね、強くなろうって思ったんだ。あ、ごめんね？昔話しちゃって…」

話を聞いた四人は、複雑な心境だった。なのはの師匠…とは違うのだが、彼女の人生に大きな影響を与えた男、流竜馬。彼の遺書とも言つべき設計図から生まれた、デバイス…そして、ゲッターロボ。四人の前に、リインが降りてきた。

「…リインは、竜馬さんを知らないのです。でもでも、みんなに渡すこのデバイス達は、竜馬さんと私達の技術と経験の粋を集めて完成させた最新型なのです。部隊の目的に合わせて、それでいて、みんな其々の個性に合わせて設計、改良された文句なしに最高のものです。この子たちには、多くの人たちの思いや願いが一杯込められて…そして、竜馬さんの遺志ともいえるものなのですよ。いっぱい時間をかけて作られたものです。だから唯の道具や武器とかわないで、大切に……だけど、性能の限界まで、全開まで使ってあげて欲しいです!」

「……はいっ!!」

リインによって浮かび上がったそれぞれのデバイスを手にした四人は、感謝の気持ちも込めて大きな声で返事をする。それを見てシャーリーたちは、喜びの笑みを見せた。

ミッドチルダ某所

薄暗い地下室の中で、一人の男が大きな装置を前にして作業をしていた。装置は隣に設置されている巨大なコンピューターに繋がれており、遠くからは機械音と溶接音が絶え間なく聞こえてくる。

「ドクター、失礼します。」

そこへ、淡い紫色の髪をした女性が部屋へと入ってきた。男は手を止めず、少し顔を後ろに向けた。

「ウーノか。どうした？」

「新型G、23機完成しました。チンク、ウェンディ、ノーヴェの三名が機動テストを行いました。テスト用の5機ともに、動作は好調のようです。」

静かにうなづくと、男は画面に目を向けた。

「それだけじゃないのだろう？ウーノ。」

「はい。して、ドクター。……後、どれくらいで完成するのですか？」

「それはわしが答えよう。」

ウーノの頭に、グロテスクな顔の老人が答えた。

「ああ、あなたでしたか…」

「ひひひ、もう少し、もう少しというところだ。それにしてもスバラシイ！今、今この瞬間でさえもアレは進化をつづけている！この研究所のゲッター数値がそれを物語っているのだよ、ふ、ふひひひひ…」

老人の不気味な笑いに、ウーノと呼ばれた女性はため息をついた。

「ええつと、もういいです…して、ドクター。ガジェットがレリックに接触しました。恐らく管理局との戦闘は避けられません。旧型とはいえ、ガジェットだけではゲッターに勝てないのでは…？」

それに、紫の髪の男は答えた。

「ああ、それは百も承知だ。今回は、レリック収集と共に、向このゲッターの性能の調査も兼ねている。どこまでゲッターGの開発が進んでいるか…も、知りたいからな。」

振り向く男と同時に、部屋の中に電気が灯る。そこには、無数のカプセルと、ゲットマシンを一回り大きくして鋭くしたような形状の戦闘機らしきものが停まっていた。

「時間は、大いにある。はは、誰も止められはしない。世界最後の日を…な。」

それは、ちょうど機動六課の隊舎に一級警戒態勢を告げるアラ-

トが鳴り響く、10分前の事だった。

機動六課隊舎

「このアラートって……」

「……一級警戒態勢!？」

突然鳴り響いたアラートに、前線メンバー全員の表情が引き締まる。なのはは冷静に、モニターに呼びかけた。

「グリフィス君!」

「はい!教会本部から出勤要請です!」

部長補佐を勤めているグリフィス・ロウラン准陸尉が答える。それに続き、朝から聖王教会に出向いていた八神はやてが、別のモニターに映し出された。

「なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君。こちらははやて。」

「一体何があったの?」

音声通信先のフェイトの言葉に、はやては説明を始めた。

「教会調査団で追っていた、レリックらしき物が見つかった。場

所はエイリム山岳丘陵地帯。対象は、山岳リニアレールで移動中。」

「移動中って…まさか!？」

はやての言葉に、フェイトは声を上げた。

「そう、そのまさかや。内部に侵入したガジェットで、車両の制御が奪われている。リニアレール車内のガジェットは最低でも30機……大型や、飛行型の未確認タイプも出ているかもしれへん。」

説明を続けるはやての表情は、険しい。それだけ、状況が好ましくないのだろう。そんなはやてを見ている為か、モニターを見る皆の表情も険しいものとなる。

「いきなりハードな初出動や。なのはちゃん、フェイトちゃん……いけるか？」

「私はいつでも!!」

「私も!!」

各々の隊長は、自信に満ちた口調で返事する。それに押されてか、新人たちも顔を上げる。

「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。みんなもオーケーか？」

「……はい!!」「……」

その元気のいい返事を聞いて、はやては笑顔になる。

「よし、良いお返事や。シフトはA - 3、グリフィス君は隊舎での指揮。リインは現場管制。」

「はい！」

「はい！」

敬礼をして、リインは場を離れ、グリフィスはモニターから消えた。

「なのはちゃんとフェイトちゃんは現場指揮！」

「うん!!」

「ほんなら、機動六課フォワード部隊……出勤!!」

「」

一斉に走り出す新人たち。

「私は後から合流するから、みんなへりに乗って! E - 6のトモ工曹長にお願いして!」

「」

なのはに一斉に返事をする、新人たちは指示を受けたへりへ向かった。

「おう、来たな。こっちだ！」

四人の先には、ヘリの前で手を振る二人の男の姿があった。その片方…帽子をかぶった大柄の男を見た瞬間、スバルは思わず声を上げてしまった。

「あ…ええっ！？あ、あの時の…！」

そう、一瞬だけ顔を合わせたスバルには分かったのだ。目の前にいる男が…

「ええと、あの…すみませんでしたあ…！」

「新デバイスでぶつつけ本番になっちゃったけど、練習通りにやれば大丈夫だからね。」

現場へと向かうヘリの中、なのはは新人達に話しかけた。なのはが来る前に色々あったようだが、武蔵は終始嬉しそうに笑っていた。

「はい！」

「頑張ります！」

「エリオとキャロ、それにフリードもしっかりですよ！」

リンに言われて、二人も

「はい!」「」

「キュクーツ!」

二人の励ましに、それぞれの言葉で元気にフォワードメンバー達が答える。もつと緊張しているかと思っただのはだったが、彼女たちも、そして武蔵も一役買っているのだと思うと心の中で礼を言った。皆に微笑むのは。

「危ない時は、私やフェイト隊長、リンがちゃんとフォローするから、おっかなびつくりじゃなくて、思いっきりやってみよう!」

「」「はい!」「」「」

すっかりとした返事に、なのはは再度満足そうな表情を浮かべながら頷く。

「てめえら、こちらら最近腰いてえんだよ…死体なんて運ばせんじゃねえぞ?」

「ちよつと、ムサシ先輩!?!」

いきなり何々と笑いながら言う武蔵に、想像してしまったのかキヤロの顔が青ざめる。

「ちよつと、武蔵さん!キヤロが固まっちゃったじゃないですか!」

「え…？あ、その、すまん。はは、ちょっと冗談を…」

「冗談が冗談に聞こえないですよ、先輩…」

あきれ半分に言うヴァイスに、なのはは苦笑した。

「キョク」

心配そうに、キャロの顔を覗き込むフリード。見ると、キャロの手が震えていた。気付いたなのはは、キャロの隣に座る。

「……大丈夫？」

「はい、すみません……」

沈黙。まるで葬式の様だと武蔵は言いたくなかったが、これ以上下手な事を言ったら口にスターライトブレイカーだろうかと冷や汗を流した。

スバルは、念話でティアナに話しかけた。

『はじめてで、いきなりになっちゃったけど……一緒に頑張ろうね、相棒。』

『ええ、スバル。だけど、この時のために私たちは訓練を続けてきた……』

『うん。だから……がんばろう！』

様々な心境でいる新人メンバーをのせてへりは飛んでいく。武蔵は険しい表情で、帽子をかぶりなおした。

キャラ Side

今、私達は、へりに乗って現場へと向かっている。この先に待っているのは実戦……今までの訓練とは違う、本番。

正直言って私は怖い。トモエ空曹が何気なく言ってたけど……ひよっとしたら、ひよっとしたら、終わった後みんなが元気に顔をそろえられるか、それは誰にも分からない。空戦の怪我や死亡事故は聞いた事はあるけど、実際に現場に居合わせると、今まで聞いてきた言葉がふつふつと蘇ってくる。ティアナさんのお兄さんや、なのはさんがさっき言っていたナガレさん。私たちより、ずっとずっと才能も経験もある人たちでも、一瞬の判断で帰らぬ人になってしまいかもしれない。

でも、でも、それ以上に……私は誰かを傷つけるのが怖い。私の竜召喚は、フリードだけじゃない。そのせいで、私は故郷を追われた……でも、私は少しほっとした。もし、何も関係のない人を傷つけてしまったら……そう思うだけで、随分変わった。

「あ……」

その時、私の手が誰かにギュッと握られた。見上げると、そこには私の心が分かったかのように無言で手を握るのはさんの姿があった。そうだ、迷っていられない。決めたから。一緒に戦うパートナーと、一所懸命な先輩達と……そして、きっと私と同じ思いを持

った優しい子。これから自分が、みんなと一緒に進む、この道を……

「なのはさん……はい！」

静かにうなづくのはさん。こんなになのはさんが頼もしく見えたのは、はじめてだった。

機動六課

「問題の貨物車両、速度70を維持。依然進行中です。」

「重要貨物室の突破は、まだされてないようですが……」

「時間の問題か……ッ！！？」

はやての代わりに指示を出すグリフィスと、シャーリーを初めとするオペレーター陣は突然鳴り始めた警戒音に表情を引き締める。

「アルト！ルキノ！広域スキャン、サーチャーを空へ！」

オペレーター陣が素早い作業で現場空域にエリアサーチを行うと、多数の機影をキャッチする。それはただちに情報として纏められていく。

「ガジェット反応……空から！」

「航空型、現地観測隊を補足！」

グリフィスの声と同時に、モニターにフェイトの顔が映った。

「こちらフェイト。グリフィス、こっちは今パーキングに到着。車停めて現場に向かうから、飛行許可をお願い。」

「了解。市街地個人飛行、承認します！」

通信が入ったフェイト達の申請を、グリフィスは迷う事無く許可をする。承認を聞くと、フェイトからの通信が切れた。

フェイトの車から、サイレンが展開される。けたたましく鳴る赤いシグナル。フェイトはパーキングエリアに車を停車させると、車の外へ走り出した。

「バルディッシュュー!!」

『Yes, s i e .』

走りながら、フェイトはバルディッシュュを空に掲げた。

「バルディッシュュ！セーラーツト・アップ!!」

その声と同時に、稲妻に似た光をフェイトが纏う。光がはじけると、そこからバリアジャケットを纏ったフェイトが空に舞い上がった。

「ライトニング1、フェイト・T・ハラオウン…行きます!!」

「武蔵さん、ヴァイス君。私も出るよ。フェイト隊長達と空を押さえる！」

「うつす。なのはさん、お願いします！」

「おうよ、行つてこい！」

『Main hatch Open』

なのはの言葉に、ヘリのパイロットである巴武蔵曹長と、ヴァイス・グランセニック陸曹がサムズアップで答える。それと同時にヘリのメインハッチが開かれる。

「お氣をつけて。」

「うん、それじゃ、行つてくるね。」

そう言つて、ハッチの方へと歩いて行こうとするなのは。しかし、何を思ったのか足を止めて、新人達の方へ引き返してきた。

「じゃ、ちょっと出てくるけど……みんなも頑張つて、ズバツとやっつけちゃおう！」

「」「」「はい！」「」「」

元氣よく答える新人たちの中にも、キャラの姿があつた。なのはも薄々気づいてはいたが…やはり、すこし体が震えていた。姿勢をかがめて、キャラに視線を合わせるなのは。

「キャラ、大丈夫だよ、そんな緊張しなくても。離れてても、通信で繋がってる。一人じゃないから……ピンチの時は助け合えるし、キャラの魔法は、みんなを守ってあげられる……優しく強い力なんだから。」

「なのはさん……」

少しずつ、元氣が戻ってくるキャラ。それを見て、微笑むなのは。それを確認すると、添えていた手を離て、メインハッチへと足を進めた。

「スターズ1、高町なのは、行きます！」

そしてハッチからなのはが飛び降りると、少しして桃色の光が空に向かって吸い込まれていった。

「任務は二つ。ガジェットを逃走させずに、全機破壊する事。そして、レリックを安全に確保する事。ですから……」

作戦内容を伝えるリイン。いつものほわほわした表情ではなく、その顔は凜々しく引き締まっている。きびきびとした指示に、少し緊張する新人たち。その隣モニターには、リニアールが映し出

されている。

「スターズ分隊とライティング分隊で、ガジェットを破壊しながら車両前後から中央へ向かうです。」

説明が進むと同時に、モニターに中央車両がズームアップされる。コンピューターで再現されたマップに、ターゲットを表すオレンジの記号が現れる。その数は、半端なものではなかった。

「これ、全部…敵ですか？」

エリオの問いに、リインは頷く。

「はいなのですよ。でも、最優先事項はレリックの確保が先だという事は忘れないでほしいのですよ。レリックはここ、七両目の重要貨物室。無駄な戦闘はできるだけ避けて、スターズがライティング、先に到達した方がレリックを確保するですよ。」

「……はいっ!!」「……」

「でっっ!!」

リインがその場で一回転するとバリアジャケットを身につけた状態になる。白を基調としたそのバリアジャケットは、なんとなく凛々しさが5%くらい上がったかのように見えた。

「私も現場に降りて、管制を担当するです。みんな、頑張ってください!」

急にいつもの様子に戻ったラインに、皆に笑いが起こる。緊迫した場が癒されると同時に、改めて新人たちは気を引きしめた。

「こっちの空域は、私達で抑える。新人達の方、フォローお願い！」

「了解！」

視界の先になのはを見つけたフェイトは、進行方向をそちらへと変える。並走するなのはとフェイト。なのはは念話でフェイトに話しかけた。

「同じ空は久しぶりだね、フェイトちゃん。」

「うん、なのは……」

すると、前後から挟み込むように戦闘機型のガジェットが数機接近してきた。しかし、それに臆することなく二人は向かっていく。

「こちらスターズ1。ライトニング1と合流後、ターゲット5機と接触。ただちに殲滅します。」

「了解しました。お気をつけて。」

頷くグリフィス。なのははフェイトに顔を向ける。

『うん。いくよ、フェイトちゃん!』

『うん、なのは!』

同時にうなづくと、空で閃光が巻き起こった。

「さーて新人ども。隊長さん達が空を押さえてくれているおかげで、安全無事に降下ポイントに到着だ。準備は良いか!」

「「「はい!」」」

ヴァイスが新人たちに檄を飛ばす。その横で武蔵も言った。

「さつきは悪い冗談言つて、すまなかったな。でもな!俺たちがいれば、お前らは絶対に死なん!背中はずてえ守つてやる。だから、怪我と始末書書かん程度に頑張んな!」

「「「はい!」」」

開くハッチ。ゆっくりとリアールに接近するヘリ。

「速度、姿勢、風向き…安定しましたっ!いつでも行けます、先

輩！！」

「そういうことだ。ようし、お前ら！まずはスターズだ！気合入れていけ！！」

「はい！スターズ3、スバル・ナカジマ……」

「スターズ4、ティアナ・ランスター……」

「「行きますっ！！」」

メインハッチから、降下を始めるスバルとティアナ。それを確認すると、続いて武蔵は指示を出す。

「へっ、いきなりミンチは避けたみてえだな。次っ、ライトニング！訓練は受けているとは思うが、風圧はあんたらの体じゃ少々きつい。チビどもは気いつけるよ！」

「「了解！」」

先に降下したスバルとティアナに続く為に、エリオは身構えて飛び降りようとする。しかし、視界にキャロが入った時にある事に気がついてその動きを止めた。

「……………」

キャロは、下で走るリニアレールをじっと見ており、ぎゅっと両手を握り締めている。そんな様子のキャロを見たエリオは少し悩んだ後にキャロに向けて手を差し出した。

「ねえキャラ……一緒に降りようか？」

「えっ……うん！」

エリオの提案に一瞬戸惑いを見せながらも、エリオの手をしっかりと握り返すキャラ。

「おおー…あの年でやるねえ。」

「うらやましそだな、嫁は二次元、彼女いない歴エターナルのヴァイス君。君の嫁をみんなに見せるぜ？今度。」

「死んでください、先輩!!」

そのやりとりを聞いて、顔を真っ赤にする二人。

「えっと…」

「あ、あの…」

「キョク…」

どうしたの？と首を傾げてくるフリードに、二人ははっとなる。すると、自分の体が宙に浮いている事に気がついた。

「お・ま・え・ら~~~~~!!」

いつまでたっても出撃しようとしなない二人にしびれを切らしたのか、武蔵が良い笑顔で二人の首根っこを掴んでいた。

「「へ？」」

「おらあ！とつと行けえ！！」

「「えっ！？あ、うわあああああ！！！」」

悲鳴を上げながら、ブン投げられるエリオとキャロ。気付くと、お互いの手をしっかりとつないでいた。

「えつと…お、遅くなつてけど！ライトニング3、エリオ・モンデリアル！」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「キュクーツ！」

「「行きます！！！」」

武蔵の言っていたように、風圧は凄かった。きつと、ちゃんとつないでいられるように突然武蔵は投げたのだと、エリオとキャロは気付いていた。最も、武蔵の理由はもつと別にあつたのだが…それはちよつと先の話かもしれない。

「ストラーダ！」

「ケリユケイオン！」

「「セット・アップッ！！！」」

はじめての実戦。だが、この戦いの裏にある影を、このときは

誰も知る由も無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7481u/>

真《チェンジ！！》リリカルなのは 世界最後の日

2011年11月20日11時24分発行